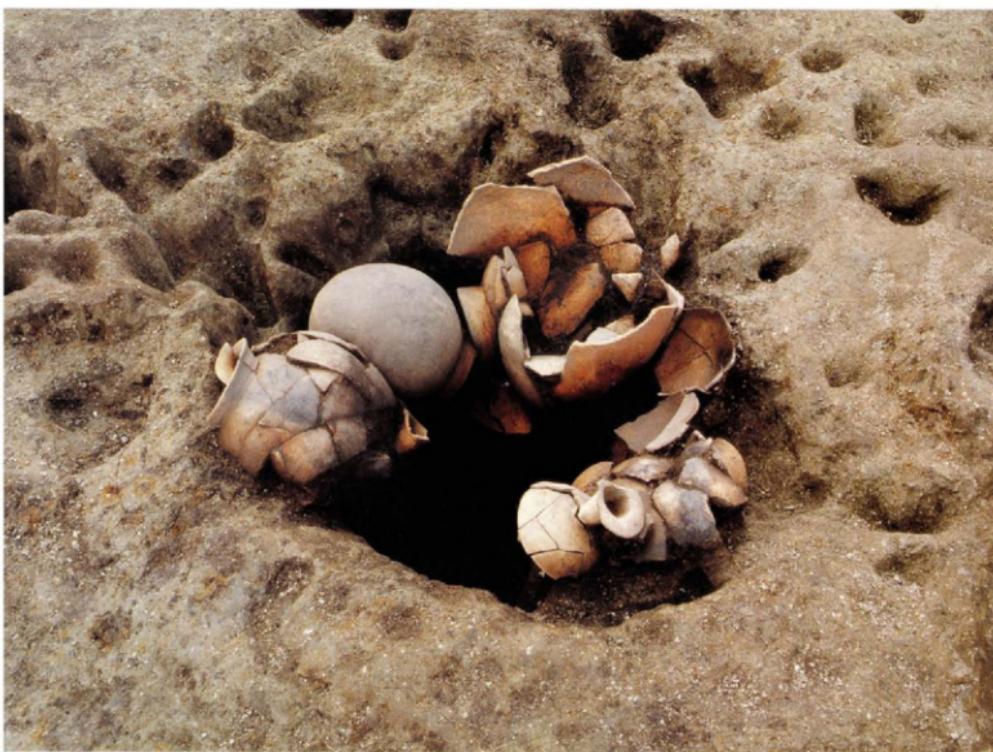


井相田C第6次

—井相田C遺跡第6次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第519集



1997

福岡市教育委員会

井相田C第6次

—井相田C遺跡第6次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第519集



調査番号 9539
遺跡略号 ISC-6

1997

福岡市教育委員会



彩文土器（2号流路出土）



彩文土器（2号流路出土）



彩文土器（2号流路出土）



土師器壺（45号土坑出土）



土師器高杯（55号土坑出土）



土師器壺（55号土坑出土）



土師器壺（55号土坑出土）

序

福岡市埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと略す）は、昭和52年2月、市内遺跡の発掘調査による出土遺物および記録類の保管・収蔵を目的として開館しました。

ところが、発掘調査の飛躍的な増大に伴う収蔵資料の増加は著しく、平成八年度末には収蔵庫は満杯になるという見通しが出るに至りました。そこで、福岡市教育委員会では、埋文センターの東側隣接地（大蔵省福岡財務支局所有）を取得し、増改築することになりました。

ところで、福岡市埋蔵文化財センターが建てられている一帯は、井相田C遺跡として、福岡市文化財分布地図に登録された周知の文化財包蔵地に当たります。これまでに、工場建設・学校建設などに際して、5次の発掘調査を実施して参りました。今回の福岡市埋蔵文化財センターの増築に際しましては、平成七年11月6日より翌年3月1日まで発掘調査を実施いたしました。発掘調査では、河川とその北岸の微高地上に営まれた古墳時代・奈良時代の集落跡を検出し、数々の貴重な成果をあげました。本書は、この井相田C遺跡第6次調査について報告するものです。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理、報告まで、さまざまな面でご協力をいただいた福岡市埋蔵文化財センターをはじめとする多くの方々に、心から感謝を表します。

平成九年三月十五日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

1. 本書は、福岡市埋蔵文化財センターの増築に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、井相田C遺跡群第6次調査（福岡市博多区井相田2丁目1-62）の概要報告書である。
2. 本書の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図は、二宮忠司（福岡市埋蔵文化財センター）、大庭友子（福岡市埋蔵文化財課調査員）、佐藤信（福岡大学）、折茂由利、大庭智子、大庭康時が作成した。また、製図には、折茂由利・下山慎子があたった。
4. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準している。
5. 本書に使用した遺物実測図は、井上涼子・上塘肯代子・大庭康時が、一部の遺物の拓本は山田美樹が作成し、井上・上塘が製図した。
6. 本書で報告する遺物については、遺構ごとに通し番号をつけて記述した。
7. 本調査にかかわる遺構写真は、大庭康時が撮影した。
8. 本書にかかわる遺物および記録類の整理には、生垣綾子・今井民代・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵・山田美樹・入江規子・江上由喜子・野田真巨・長谷川浩美・樹屋育子・森純子があたった。
9. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9539	遺跡略号	ISC-6
調査地地名	博多区井相田2丁目1-62	分布地図番号	麦野
開発面積	3481.75m ²	調査面積	2249m ²
調査期間	1995年11月6日～1996年3月1日		

目 次

第一章 はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
第二章 発掘調査の記録	5
1. 発掘調査の方法	5
2. 発掘調査の経過	5
3. 発掘調査の概要	6
4. 遺構と遺物	11
(1) 壊穴住居跡	11
1号壊穴住居跡 (SC01)	11
3号壊穴住居跡 (SC03)	15
5号壊穴住居跡 (SC05)	17
2号壊穴住居跡 (SC02)	15
4号壊穴住居跡 (SC04)	17
6号壊穴住居跡 (SC06)	17
(2) 掘立柱建物跡	18
1号掘立柱建物跡 (SB01)	19
3号掘立柱建物跡 (SB03)	20
5号掘立柱建物跡 (SB05)	21
7号掘立柱建物跡 (SB07)	22
2号掘立柱建物跡 (SB02)	20
4号掘立柱建物跡 (SB04)	21
6号掘立柱建物跡 (SB06)	22
柱穴と出土遺物	24
(3) 井戸	26
31号土坑 (SK31)	26
51号土坑 (SK51)	29
50号土坑 (SK50)	27
55号土坑 (SK55)	30
(4) 土坑	35
01号土坑 (SK01)	35
05号土坑 (SK05)	41
24号土坑 (SK24)	42
28号土坑 (SK28)	44
39号土坑 (SK39)	47
44号土坑 (SK44)	48
56号土坑 (SK56)	52
62号土坑 (SK62)	54
66号土坑 (SK66)	56
03号土坑 (SK03)	36
09号土坑 (SK09)	41
25号土坑 (SK25)	43
30号土坑 (SK30)	46
43号土坑 (SK43)	48
48号土坑 (SK48)	52
57号土坑 (SK57)	54
65号土坑 (SK65)	54
69号土坑 (SK69)	57
(5) 溝状遺構	59
1号溝状遺構 (SD01)	59
3号溝状遺構 (SD03)	59
5号溝状遺構 (SD05)	59
2号溝状遺構 (SD02)	59
4号溝状遺構 (SD04)	59
6号溝状遺構 (SD06)	59

7号溝状遺構 (SD07)	59	8号溝状遺構 (SD08)	61
9号溝状遺構 (SD09)	61	10号溝状遺構 (SD10)	61
11号溝状遺構 (SD11)	61	12号溝状遺構 (SD12)	61
13号溝状遺構 (SD13)	61	14号溝状遺構 (SD14)	61
15号溝状遺構 (SD15)	61	16号溝状遺構 (SD16)	61
17号溝状遺構 (SD17)	61	18号溝状遺構 (SD18)	61
19号溝状遺構 (SD19)	62	20号溝状遺構 (SD20)	62
21号溝状遺構 (SD21)	62		
(6) 旧河川			63
第三章　まとめ			71

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

福岡市埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと略す）は、昭和52年2月に開館した。市内遺跡の発掘調査による出土遺物および記録類の保管・収蔵を目的とした施設で、木器・金属器の保存処理も行っている。

ところが、発掘調査の飛躍的な増大に伴う収蔵資料の増加は著しく、昭和63年度には早くも収蔵庫を増築せざるを得なかった。この傾向は一向に鎮静化せず、平成5年度にはすでに木器・金属器などの特別収蔵庫は不足し、民間倉庫に寄託するようになっていた。土器・石器の収蔵庫も、平成8年度末で満杯になるという見通しが出るに至った。

この状況に対して埋文センターでは、東側隣接地（大蔵省福岡財務支局所有）を所得し、増改築することとした。当該地は、井相田C遺跡に含まれ、周辺ではこれまでたびたび発掘調査が行われており、遺跡の存在が予想された。そこで、埋文センターからの依頼を受けた埋蔵文化財課では、平成3年7月30日に試掘調査を実施、遺構の存在を確認した。

その後、平成6年度中に土地払い下げ、7年度発掘調査、8年度設計、9年度着工と工程が固まるに至り、埋蔵文化財課の調査予定を勘案し、平成7年11月より発掘調査を実施することとなった。

2. 発掘調査の組織と構成

調査依頼	福岡市教育委員会	埋蔵文化財センター	所長	折尾 学
調査主体	福岡市教育委員会		教育長	尾花 開（前任） 町田英俊（現任）
調査総括	同	埋蔵文化財課	課長	荒巻輝勝
	同		第二係長	山口諭治
調査庶務	同		第一係	入江幸男（前任） 小森 彰（現任）
調査担当	同		第二係	大庭康時
調査作業	佐藤信（福岡大学） 石川君子 井口正愛 今林加津江 江越初代 大久保五枝 大久保学 太田みゆき 大庭智子 折茂由利 河野恒子 岸本祥子 北垣義克 草場恵子 小路丸良江 小路丸嘉人 指原始子 杉山正孝 清水明 関加代子 関義種 曾根崎昭子 都野浩之 寺岡恵美子 永隈和代 小込陽子 長田嘉造 永田優子 能丸勢津子 萩尾寛文 花田克子 早川浩 平本恵子 村崎祐子 安元尚子 山野妙子 吉田市芳 吉田清 吉村智子 脇田栄			

このほか、発掘作業に関わる諸条件の整備・調査中の便宜については、福岡市埋文センターよりご協力をいただいた。また、遺構実測に際しては、二宮忠司氏（埋文センター）、大庭友子氏のご助力をいただいた。記して、謝する次第である。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

井相田C遺跡は、福岡市博多区の最南端に位置し、大野城市と境を接する。地形的には、御笠川中流域西岸に形成された沖積平野である。現況では低平な水田と、これを埋め立てた倉庫・工場地であるが、本来は沖積平野の低地に微高地が点在しており、その上に遺跡が立地している。

周辺の遺跡に目を転じると、井相田C遺跡のすぐ東側には、大野城市内にまたがるが仲島遺跡が知られている。仲島遺跡では、これまでに福岡市側で3次、大野城市側でも6次を越える調査が行われている。それによると、仲島遺跡は弥生時代中期前半から奈良時代、さらに鎌倉時代にわたる複合遺跡である。注目すべき遺構・遺物が多く、貨幣（王莽錢）、後漢鏡片、青銅製鋤先、銅鑓、銅矛頭型、滑石製模造品、人面墨書き土器などが出土している。

井相田C遺跡の西の中位段丘上には、麦野A遺跡が立地している。古代・中世の集落遺跡である。麦野の台地は、南に長く延びてやがてその幅を広げ、手指状に枝分かれしていく。このそれぞれに奈良時代を中心とした集落遺跡が乗っている（麦野B遺跡、麦野C遺跡、南八幡遺跡、雜餉隈遺跡など）。麦野の台地を北にとると、断続的に中位段丘が続き、学史的にも著名な遺跡群が展開していく。南から北にこれらを列記すれば、わが国で最初に水稻農耕が定着した環壕集落・水田遺跡として知られる板付遺跡がある。国指定史跡であり、すでに整備を終えて、公開されている。板付遺跡のすぐ西には、朝鮮系無文土器が多く出土した諸岡遺跡がある。ナイフ型石器を出す旧石器時代の遺跡でもある。板付遺跡の北には、水田遺跡である那珂君体遺跡をはさんで、那珂遺跡・比恵遺跡と続く。那珂遺跡では、縄文時代晩期に遡る二重環壕が見つかった。また、福岡平野最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が築かれている。那珂八幡古墳の主体部は未調査であるが、後円頂部の第二主体部から三角縁神獸鏡が出土している。比恵遺跡は、弥生時代から中世に及ぶ複合遺跡である。弥生時代中期の覆輪墓から絹を巻いた銅劍が出土した。日本最古の絹とされている。また、弥生時代の青銅器の鋳型・取り瓶などが出土しており、ここで青銅器の鋳造が行われたことは疑いない。弥生時代の鉄器（特に鉄斧）の出土も卓越している。古墳時代では、「那津官家」かとされる倉庫群の遺構なども検出されている。

井相田C遺跡では、これまでに5次の発掘調査が実施してきた。ただし、この調査次数の数え方には、かなりの混乱がみられる。それは、隣接する仲島遺跡との兼ね合いで、福岡市教育委員会が福岡市域で調査した仲島遺跡付近の発掘調査を、仲島遺跡とするか、井相田C遺跡に含めるかという点に、なんら整理が行われなかったことによる。1981年刊行の福岡市文化財分布図（東部I）では井相田C遺跡の存在は知られていない。その後、仲島遺跡の西側に新たな遺跡が発見され、これを井相田C遺跡とした。1996年改訂の福岡市文化財分布図（東部I）では、井相田C遺跡は周知されたが、かつて仲島遺跡として福岡市教育委員会が調査した1次から3次の調査の内1次・2次調査地点までが井相田C遺跡に含まれてしまった。この間の経緯については、1996年刊行の福岡市埋蔵文化財調査報告書第458集「井相田C遺跡 第5次」に詳しいので、そちらを参照していただきたい。結局のところ、この調査名の混乱は未解決であるが、調査時に示された呼称にしたがい、第6次調査として報告を行うものである。

さて、本調査地点のすぐ南に当たる第2次調査では、奈良時代～平安時代の集落、鎌倉時代の土塙墓、室町時代の水田・池が調査された。古代の集落は、さらに南の第1次調査地点から延びる集落の北端をおさえたもので、本調査地点とは連続しないことが予想された。



1. 片相田C遺跡 A第6次調査 2. 仲島遺跡 3. 麦野A遺跡 4. 麦野B遺跡
5. 麦野C遺跡 6. 南八幡遺跡 7. 雜餉隈遺跡 8. 三筑遺跡 9. 笹原遺跡
10. 高畠遺跡 11. 諸岡A遺跡 12. 諸岡B遺跡 13. 板付遺跡 14. 那珂君体遺跡
15. 那珂遺跡 16. 那珂八幡古墳 17. 比恵遺跡 18. 五十川高木遺跡 19. 井尻B遺跡
20. 曰佐遺跡 21. 須玖遺跡群 22. 須玖唐梨遺跡 23. 須玖永田遺跡 24. 雀居遺跡

Fig.1 井相田C遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

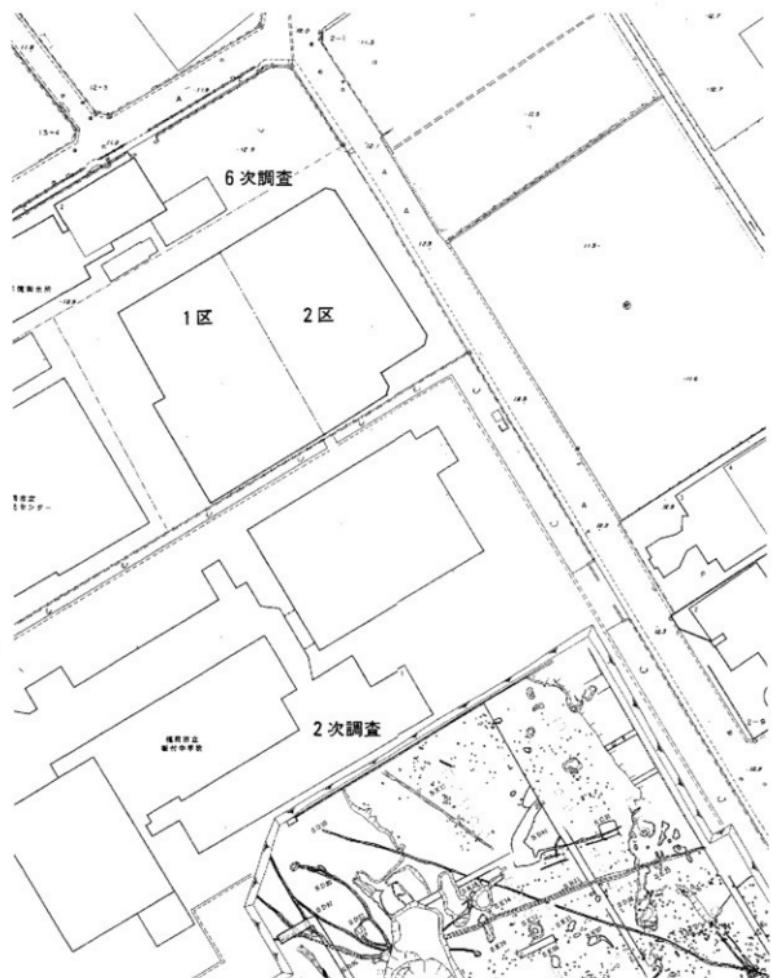


Fig.2 井相田C遺跡第6次調査地点位置図 (1/500)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法

発掘調査に際しては、掘削によって生じる残土は申請地内において処理することが前提であった。そこで、調査対象地を埋文センター側と東側とに二分し、打って返しを行うこととし、まず埋文センター側の約半分について発掘調査に着手した。調査と整理報告に当たっては、この埋文センター側の半分を1区、東側半分を2区としている。

まず、試掘調査でも判明していた調査対象地全体をおおう厚い盛土を重機で取り除くことから始めた。その結果、1区では旧河川の黒褐色粘土が、2区では沖積地の堆積物である灰茶色の砂質土が検出された。

1区については、そのほぼ全面が河川の堆積土であったことから、すべての土壤について掘削を行ったら、調査期間が幾らあっても足りないと判断、平行して数本のトレーナーをいれ、河川の方向、埋積時期などを把握するにとどめることとした。なお、1区に若干かかった砂礫層上の遺構については、通常の遺構検出・精査を行うこととした。

2区は、1区とは逆に大半が微高地（砂礫層）上で、わずかに旧河川部分がかかっていた。この河川部分については、1区でその概要をつかんだものと判断し、掘削は実施していない。

微高地の遺構には、柱穴・土坑（井戸を含む）・溝の種別ごとに遺構番号をつけた。遺構の登録、遺物の取り上げなどは、この遺構番号によっている。

遺構実測に当たっては、調査対象地の形状に合わせて、基準軸を設定した。これに基づいて、河川部分については50分の1で平板実測、微高地部分については20分の1で平面図を作成した。さらに、遺構単位では、必要に応じて10分の1もしくは20分の1で個別の実測図を作成している。発掘調査地点の位置図は、福岡市土木局が作成している500分の1の道路台帳地図を下図にして、調査区内の基準点から要所要所の角度を読むことによってこの下図にはめ込んで作成した。

遺構の記録写真は、35ミリの小型と6×7の中判を用い、それぞれモノクロとカラースライドで撮影した。

2. 発掘調査の経過

発掘調査の経過を、調査日誌から抜粋して記す。

平成7年 11月6日 バックホーにて1区の表土剥ぎを開始する（～18日）。

11月8日 旧河川にトレーナーを設定。調査作業に入る。

11月27日 1区微高地部分遺構検出・調査。

12月20日 1区埋め戻し（～25日）。

12月25日 2区表土剥ぎ（～27日）。

平成8年 1月8日 現場仕事初め。2区調査開始。

2月27日 2区埋め戻し開始

3月4日 2区調査終了

3月7日 埋め戻しが終わり、調査をすべて終了する。

3. 発掘調査の概要

今回の井相田C遺跡群第6次調査では、柱穴1100基、土坑（井戸を含む）113基、溝状遺構21基、堅穴住居跡6棟、旧河川3条を検出した。

このうち柱穴・土坑・溝状遺構などの生活遺構は、調査区の北半分を占める微高地上に分布し、調査区南半分には旧河川が東から西に流れている。柱穴や土坑の一部は、微高地から河川にかかる傾斜面から検出されており、この部分に関しては、遺構が川によって洗い流されている状況がみて取れる。一方、後述する1号土坑・3号土坑など、水着きを利用したと思われる遺構もある。このことから、一部の遺構が川に洗われて失われたにせよ、本来、川の位置は層大きく変わってはいないものと思われる。したがって、今回の調査は、微高地上に立地した集落の縁辺部をとらえたものと考えられる。

柱穴からは、7棟の掘立柱建物跡を復元した。2間×2間の倉庫状の建物が主である。しかし、ほとんどの柱穴が、建物として把握できおらず、なお多数の建物が存在したことはまちがいない。

土坑には、きちんと長方形のプランを持つものと、円形のもの、不整形のものがある。井戸はおおむね円形で、円柱状に掘られている。長方形の土坑については、用途は不明である。

溝状遺構は、遺存した状況を見る限りでは、排水の機能を負ったものは少ないようで、小規模な区画を意図して掘られたものと思われる。

これらの集落遺構は、土坑の一部に弥生時代に属するものがあるが、ほとんどは6世紀から8世紀頃、旧河川は8～9世紀から中世後半までと考えられる。



Ph.1 1区全景（北より）

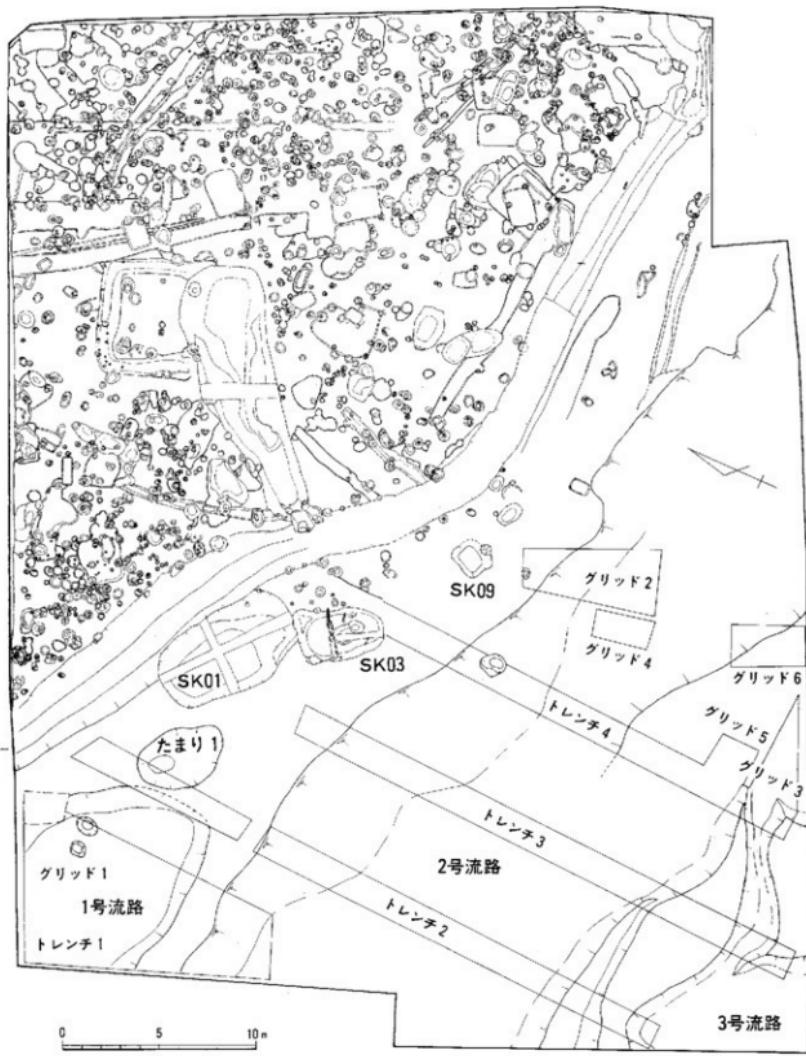


Fig. 3 井相田C遺跡第6次調査全体図 (1/125)



Ph.2 2区北半全景（南西より）



Ph.3 2区南半全景（南西より）



Fig. 4 微高地上造模全体実測図 (1/50)

なお、あたかも微高地と河川跡を区画するように緩く蛇行した溝が掘られている。この溝は近代以後に掘られたもので、遺構とはまったく関係はない。しかし、溝の方向は微高地から河川部分に下降していく傾斜面や、河川の方向とよく一致している。現在では盛り土され、平坦にしか見えないが、比較的最近まで旧地形の起伏が残っていたことを示すものといえよう。

4. 遺構と遺物

本調査では、堅穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・柱穴・溝状遺構・河川跡などを検出した。河川跡を除いて、調査区の北東部を占める微高地上で検出された。

(1) 堅穴住居跡

今回の調査では、壁の掘り込みをとどめた住居跡1棟、壁溝を残したもの1棟、柱穴の配置から推定できたもの4棟で計6棟の堅穴住居跡を検出した。

1号堅穴住居跡 (SC01)

2区中程からやや北寄りで検出した堅穴住居跡である。堅穴の掘り込みはすでに削平されて、壁溝と4本の主柱穴が残っていただけである。さらに住居跡の南辺は、近世の溝状遺構によって、掘り抜かれている。

正方形に近く復元され、壁溝の外側で一辺約6メートルをはかる。壁溝の幅は広く、70~110センチをはかる。ただし、溝の外壁は急傾斜で、内壁は緩く傾く。壁体は、溝の外壁に沿って建てられたものと推定できる。主柱穴は大きく、差し渡し80センチ、深さ60~80センチをはかる。また、主柱穴の柱間は広く、南北筋で348センチ、東西筋で294センチである。

Fig. 6は、壁溝から出土した遺物である。1・2は、須恵器の环である。内外面とも、横撫で調整さ



Fig. 4 1号堅穴住居跡 (南より)

れる。3～5は、土師器である。3は、壺である。器壁が摩滅しており、調整痕跡はほとんど見えないが、口縁部の内外は横撫で調整される。4は、鉢であろうか。外面の一部には、薄く縦方向の刷毛目調整痕が見えるが、外面とも丁寧に鎧磨きされている。5は、壺である。口縁の外面は、横撫で調整される。体部外面は、縦方向の刷毛目調整である。

6は、滑石製の紡錘車である。細かく削りをいれて、面を整える。

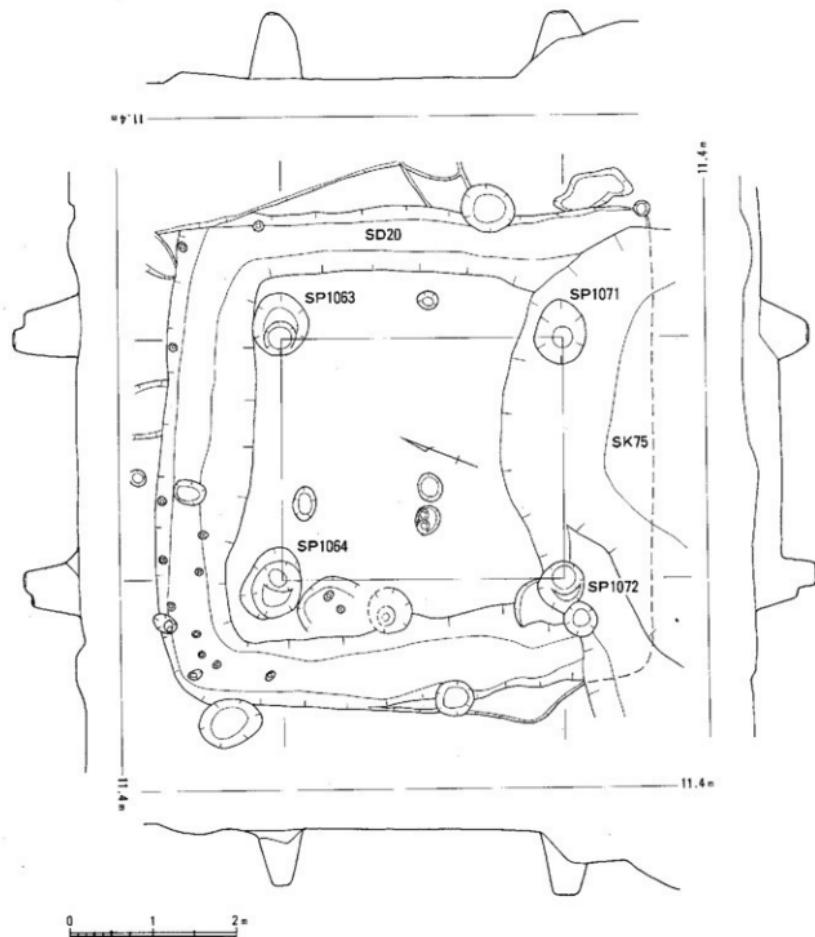


Fig.5 1号整穴住居跡実測図 (1/60)

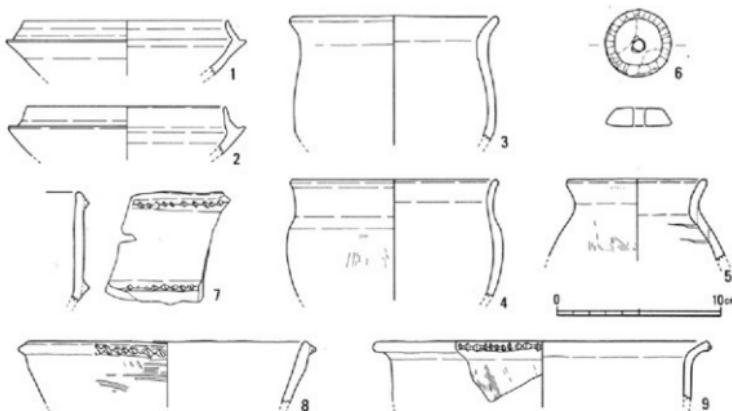
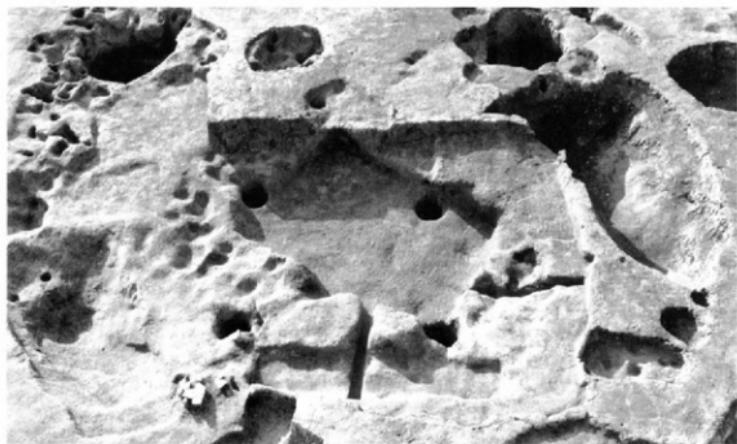


Fig. 6 1号堅穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

7・8は、縄文時代晩期の夜臼式土器の甌である。口縁端部の外面に刻み目突帯を貼り付ける。7は、体部中位にも刻み目突帯を巡らせるが、体部はここから屈折してすぼまっていく。9は、弥生時代前期の甌である。緩く湾曲して外反した口縁の外端に刻み目をいれる。体部外面は、継方向の刷毛目調整である。

須恵器・土師器の年代觀から、6世紀末～7世紀初頭の堅穴住居跡と考えられる。



Ph. 5 2号堅穴住居跡 (東より)

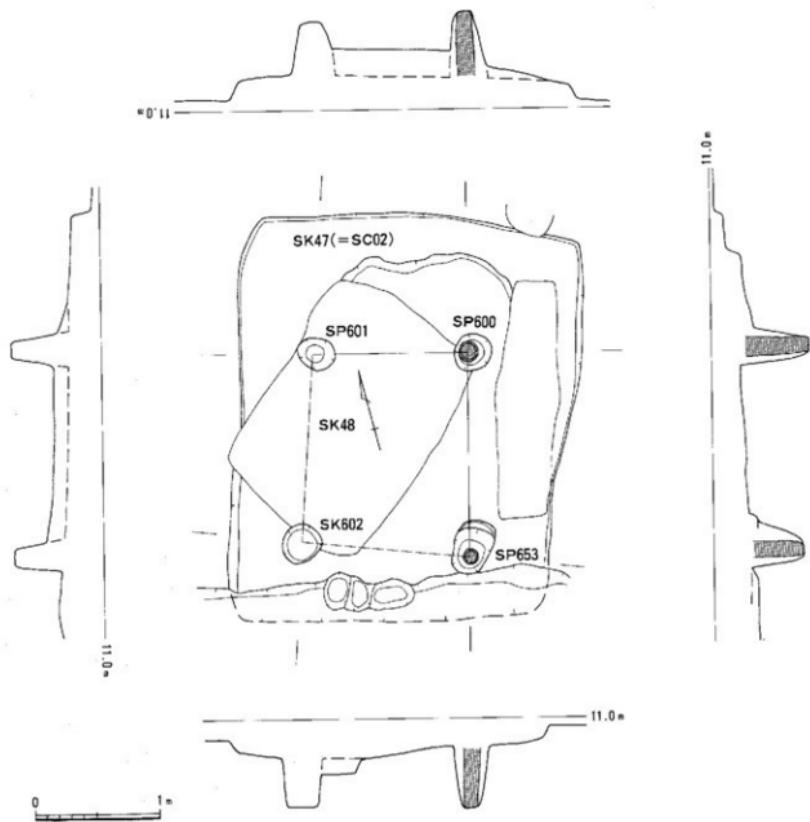


Fig. 7 2号竖穴住居跡実測図 (1/40)

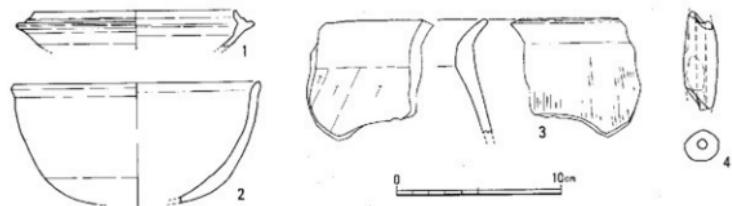


Fig. 8 2号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

2号竪穴住居跡 (SC02)

調査区の東寄りから検出した竪穴住居跡である。検出当初は、47号土坑として扱っていた。掘削がほぼ終了し、主柱穴を検出するに及んで、竪穴住居跡と認定したものである。

周囲の壁は、南東辺を16号溝に切られ、失う。北西辺で260センチ、南西辺で308センチ以上をはかる。床面のほぼ中央を48号土坑に切られている。この他いくつかの土坑が掘り込まれていたようで、床面は凹凸に富み、およそ平坦とはいがたい。検出面から残っていた床面までの深さは、8~16センチをはかる。

主柱穴は、長方形に4本配置される。柱間は、北東で168センチ、南東136センチ、南西152センチ、北西128センチをはかる。SP600とSP653の柱穴で、柱痕跡が確認できた。それらから見て、柱は、直径13~16センチであったと推定される。

そのほか、壁溝・炉・窓などは見られなかった。

Fig.8 に出土遺物の主要なものを図示した。1は、須恵器の壺である。内外面とも、横撫で調整する。2・3は、土師器である。2は、深碗形の鉢である。口縁は、小さく外反する。器壁が荒れており、調整痕跡は見えない。3は、壺である。口縁部の内外は横撫で調整、体部外面は縱方向の刷毛目、内面は縱に削り上げる。4は、土鍤である。両端部を欠失している。指押さえで成形され、焼成は土師質である。

これらの出土遺物から、7世紀初め頃の竪穴住居跡と考えられる。

3号竪穴住居跡 (SC03)

調査区内の微高地の西端付近から、1区と2区にまたがって検出した竪穴住居跡である。竪穴の掘り込み・壁溝などはまったく

残らず、土柱穴のみ確認した。

柱穴の配置と規模から、竪穴住居跡と判断したものである。

柱は、1間四方、あるいは北西と南東の柱筋の中間にそれぞれ1本の柱をつけ加えた1間四方に配置される。柱間は、264~276センチをはかる。

SP15の一部とSP131は、7号土坑の埋土の下から検出されており、これに先行する建物であることは疑いない。

3号竪穴住居跡の時期については、直接的にこれを示す資料がないが、切り合い関係などからみて、7~8世紀であろう。

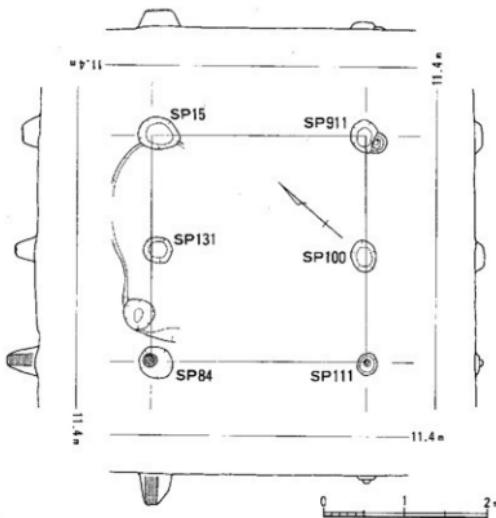
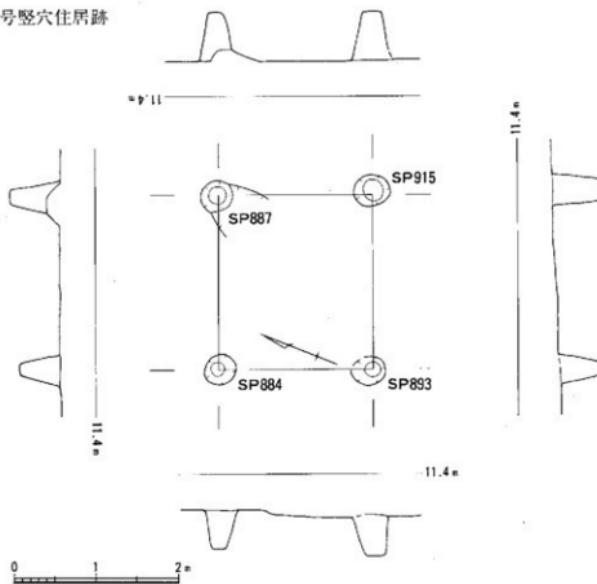


Fig.9 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

4号竖穴住居跡



5号竖穴住居跡

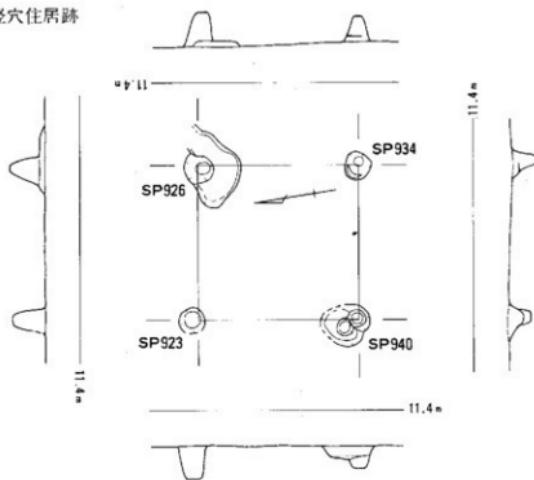


Fig.10 4号・5号竖穴住居跡実測図 (1/60)

4号堅穴住居跡 (SC04)

3号堅穴住居跡の北側で検出した堅穴住居跡である。堅穴の掘り込みはすでに失われ、主柱穴のみが検出された。3号堅穴住居跡と同様に、柱穴の配置と規模から推定した住居である。

柱の間隔は、南北筋204センチ、東西筋216センチをはかる。

南西角のSP895から24ページのFig.19に示した土師器の小壺蓋が出土している。口縁部を欠く。休部上半は撫で調整、内面の下半は緩方向の撫で上げ、外底部は削りである。

時期を積極的に判断するに足る資料はない。

5号堅穴住居跡 (SC05)

4号堅穴住居跡のさらに東側で検出した堅穴住居跡である。堅穴の掘り込みはすでに削平され、柱穴の配置・規模から判断した。

柱間は、130センチ前後のほぼ方形である。

時期を示す遺物は出土していない。

6号堅穴住居跡 (SC06)

微高地中程の、やや東寄りから検出した堅穴住居跡である。堅穴の掘り込みは残っておらず、柱穴の配置と規模から想定した住居跡である。

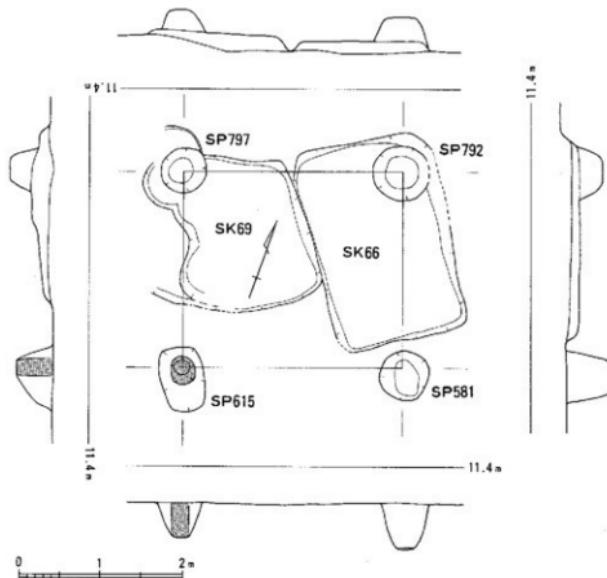


Fig.11 6号堅穴住居跡実測図 (1/60)

柱穴の配置はほぼ長方形で、東西筋が270センチ、南北筋が240センチをはかる。柱穴は大きく、直径55~65センチで、柱痕跡が確認できたSP615によると、柱の直径は21センチほどとなる。

遺構の時期を示すような遺物は、出土していない。竪穴住居跡の方向としては、1号竪穴住居跡と同じ方位をとっている。これをもって、ほぼ同時期とするのなら、7世紀前半の住居ということになる。

(2) 挖立柱建物跡

今回の調査では、7棟の掘立柱建物跡を検出した。このうち、調査時に確認したものは、2号掘立柱建物跡のみで、その他は調査終了後、図面上で検討して想定したものである。今回の調査では、1100基の柱穴が調査され、そのほとんどは掘立柱建物跡の柱跡と思われる。しかし、大部分の柱穴は、建物として把握できておらず、さらに多数の建物があったことは間違いない。



Ph.6 SP104柱痕跡（南西より）

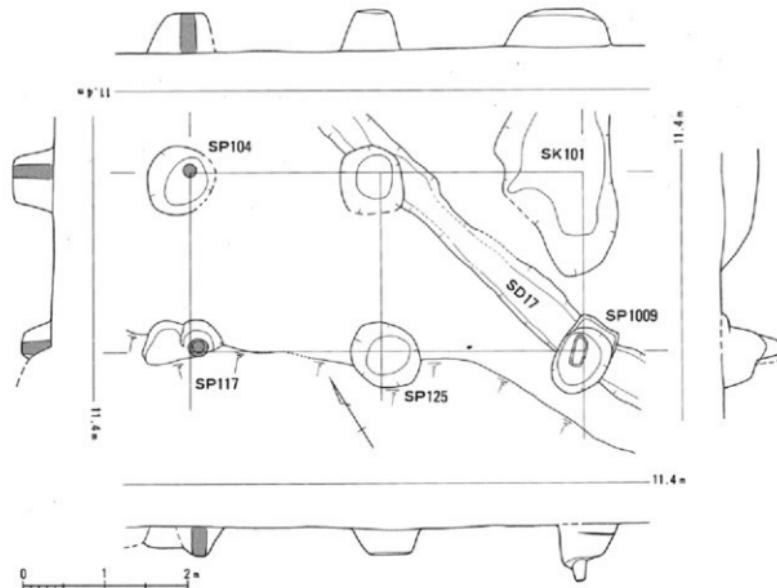


Fig.12 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

1号掘立柱建物跡 (SB01)

微高地縁辺部近く、近・現代の溝に切られて検出された掘立柱建物跡である。1区と2区にまたがっている。

1間×2間分を確認したが、おそらく旧河川側に延びて、2間×2間の総柱建物になるものと思われる。東角の柱穴は、101号土坑に切られ失われている。また、北辺と東辺の中柱は、17号溝を切っている。柱穴は大きく、直径70~90センチをはかる。西辺のSP104とSP117において、柱痕跡を確認した。それによると、柱の直径は20センチほどで、柱穴に対してはすいぶんと細いことになる。また、東辺の中柱であるSP1009の底部には、礎板を敷いたと思わせる長細いくぼみがみられた。

土坑や溝との切り合い関係から8世紀の掘立柱建物跡と考えられる。

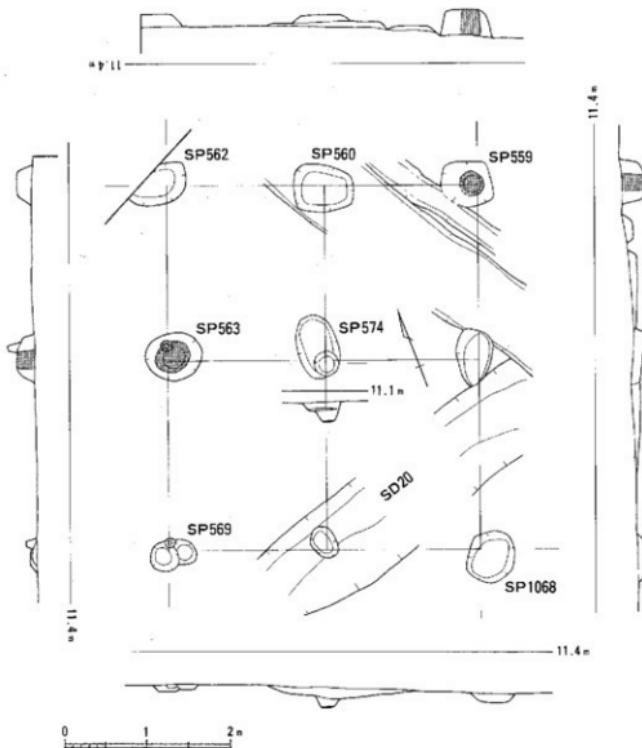


Fig.13 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

2号掘立柱建物跡 (SB02)

調査区中央の北寄りから検出した。前述した1号竪穴住居跡と重複するが、前後関係は明かではない。

2間×2間の総柱建物跡である。柱間は、南北筋で215～235センチ、東西筋で190～195センチと、南北にやや長い建物である。SP559・SP563・SP563で柱痕跡を確認した。そこから推定した柱の直径は、約30センチである。

柱穴からの出土遺物は少なく、時期は決めがたい。

3号掘立柱建物跡 (SB03)

調査区中央の北寄り、2号掘立柱建物跡のすぐ東側から検出した。南西角のSP703が、後述する62号土坑を切る。

2間×2間の総柱建物跡である。柱間は、南北筋で150～165センチ、東西筋で140～180センチと、やや小振りな建物である。

SP703からは、Fig.19-3に図示する石包丁が出土しているが、建物の時期を示すものではなかろう。62号土坑からは、弥生時代の土器片や黒曜石のチップが少量出土しているが、時期を決める参考にはなりがたい。

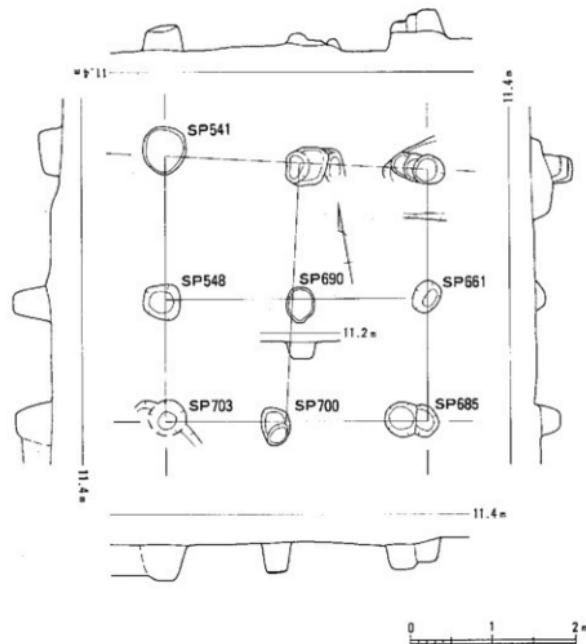


Fig.14 3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

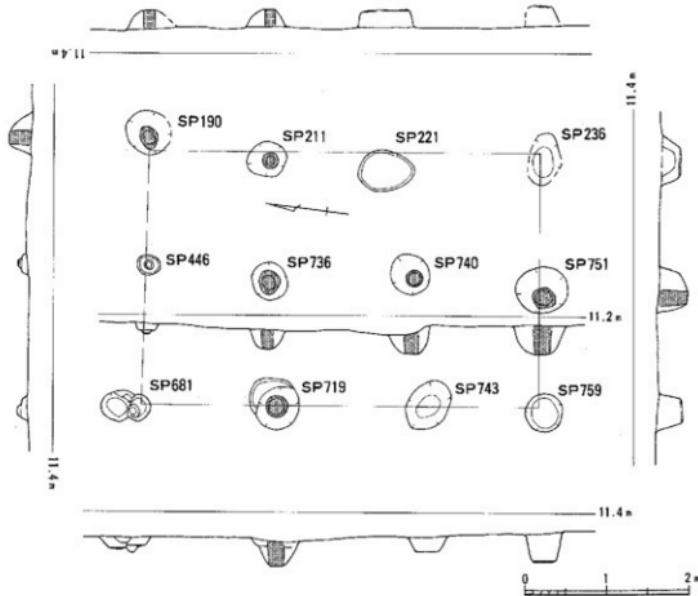


Fig.15 4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

4号掘立柱建物跡 (SB04)

調査区中ほどの東寄りから検出した。柱穴の並びがいびつで、復元に若干疑問が残るが、周囲の柱穴との関わりなど検討した結果、ひとつの建物として想定したものである。北東角のSP190が、次に述べる5号掘立柱建物跡のSP191を切る。

2間×3間の総柱の南北棟である。柱間は、南北筋で150～180センチ、東西筋で140～180センチと、かなりばらつきがある。SP221・SP759は、柱を埋めて固定するため、掘り方に粘土をつめている。

SP719・SP759から須恵器の高台坏、坏蓋が出上しており、7世紀後半に位置づけられる。

5号掘立柱建物跡 (SB05)

調査区中ほどの東寄りから検出した。前述したように、北西角のSP191が、4号掘立柱建物跡のSP190に切られる。

2間×2間の総柱建物跡である。柱間は、南北筋で170～190センチ、東西筋で170センチをはかる。柱痕跡をとどめた柱穴から、柱の直径を推定すると、およそ12～15センチという数字が得られる。SP231・SP249の掘り方には、粘土をつめる。

柱穴からの出土遺物は少なく、時期の決め手を欠く。

6号掘立柱建物跡 (SB06)

調査区中央の東寄りから検出した。次に述べる7号掘立柱建物跡の柱穴を切る。
2間×2間の総柱建物跡である。柱間は、南北筋で170～200センチ、東西筋で180～190センチをはかる。柱痕跡をとどめた柱穴から、柱の直径を推定すると、およそ15～20センチという数字が得られる。SP254・SP257・SP776・SP781・SP788では、柱の掘り方に粘土をつめている。

SP781・SP788から須恵器の坏蓋が出土しており、8世紀前半に位置づけられる。

7号掘立柱建物跡 (SB07)

調査区の東寄りから検出した。前述した6号掘立柱建物跡に切られる。
2間×2間の側柱建物跡と思われるが、6号掘立柱建物跡の柱穴によって、柱穴2基を失う。柱間は、桁行(長辺)で240～245センチ、梁間(短辺)で180～200センチをはかる。柱痕跡をとどめた柱穴から、柱の直径を推定すると、およそ10～18センチという数字が得られる。SP253・SP297・SP775では、柱の掘り方に粘土をつめている。

SP253から出土した須恵器の蓋によれば、6世紀中頃～後半となる。

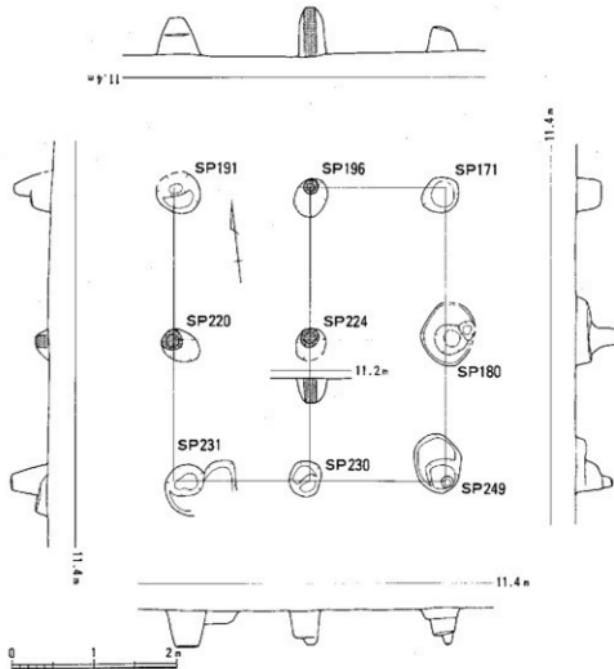


Fig. 16 5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



Ph.7 6号振立柱建物跡 SP254粘土充填状況（北西より）

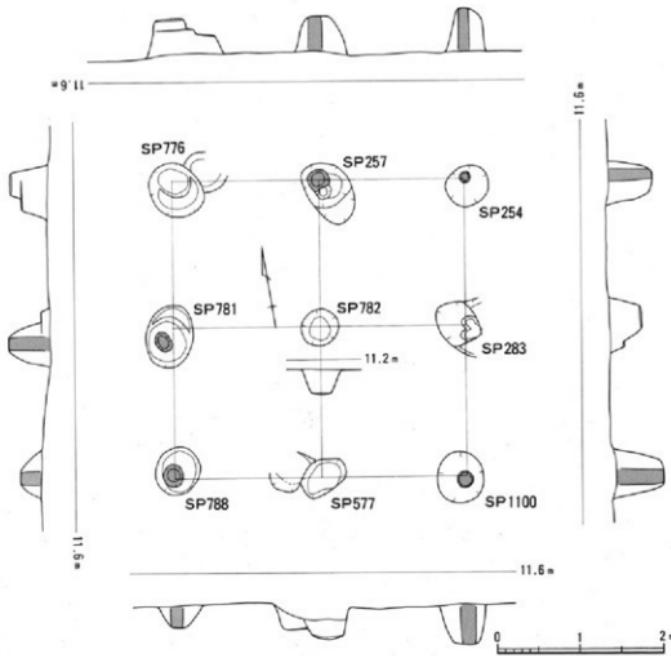


Fig.17 6号振立柱建物跡実測図 (1/60)

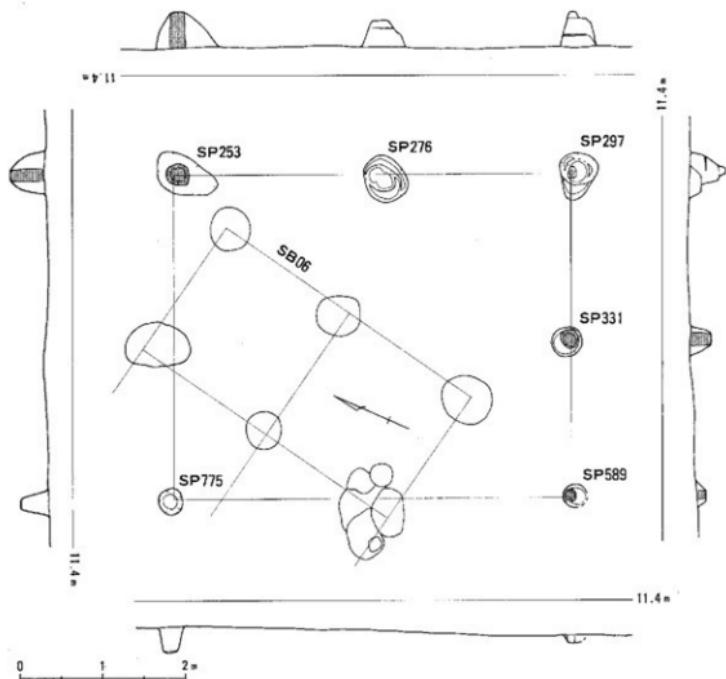


Fig. 18 7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

柱穴と出土遺物

本調査検出の柱穴には、掘り方内を粘土で充填して柱を固定したものがあった。また、柱材が遺存した例も、小数ではあるがみられた。その一部を Ph.8 に紹介する。

Fig.19 には、柱穴から出土した遺物の内、岡化に耐えたものを示した。1 は、SP839 から出土した土師器の小壺である。体部下半は横位の削り、内面の下半は綾方向に撫で調整する。2 は、石製の紡錘車である。3 は、石包丁である。穿孔中に折損したものを研ぎなおしたものである。4 は、碧玉製の管玉である。長さ 1.34 センチ、幅 0.55 センチをはかる。5 は、黒曜石の石鎚である。

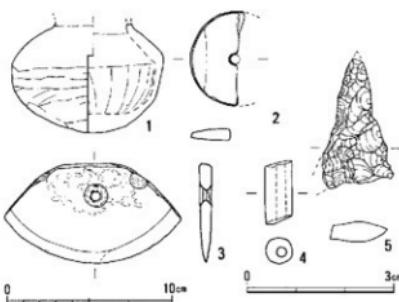
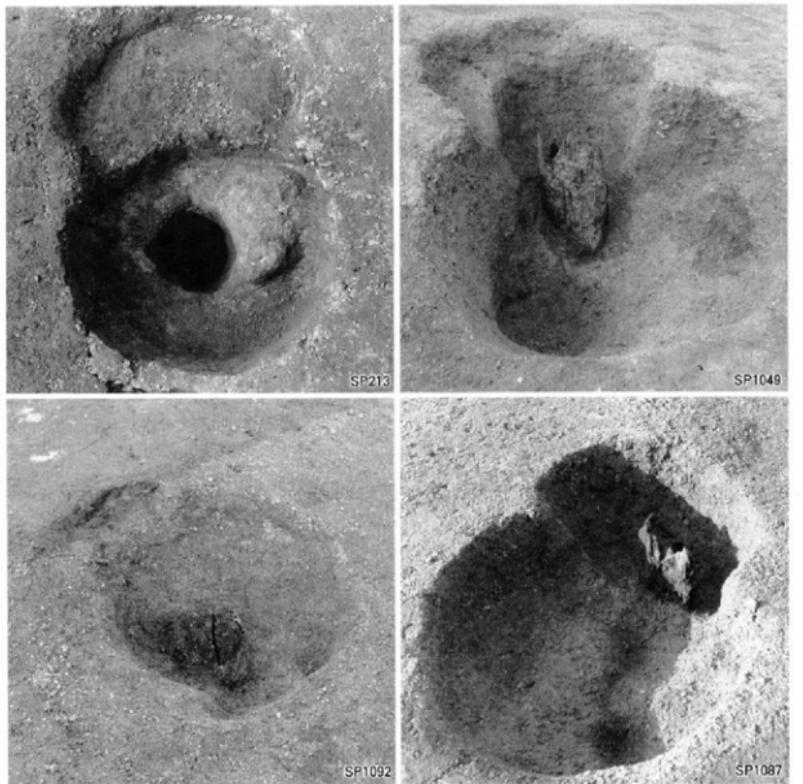
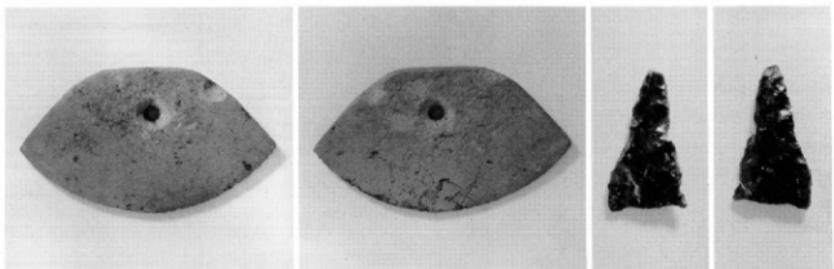


Fig. 19 柱穴出土遺物実測図 (1~3-1/3, 4~5-1/1)



Ph.8 柱穴検出状況



Ph.9 柱穴出土遺物（縮尺不同）

(3) 井戸

上坑の内、円形の平面を持ち、壁が立って深さのあるものを井戸とした。したがって、遺構検出時につけた遺構番号は、土坑の通し番号の中に含まれている。遺物の取り上げ・記録類の登録などすべてこの遺構番号によっているので、報告するに当たっても調査時の遺構番号によることとする。

31号土坑（SK31）

調査区の北端近くで検出した井戸である。

長軸143センチ、短軸120センチの卵型を呈し、検出面から床面までの深さは64センチをはかる。素掘りの井戸である。

弥生土器小片、黒曜石チップなどが出土した。一方、12号溝を切っており、12号溝からは6世紀前半頃の須恵器が出土していることから、これよりも年代的に下ることは間違いない。

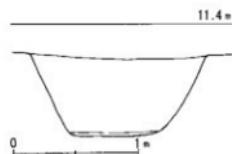
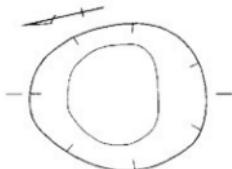


Fig. 20 31号土坑実測図 (1/40)

45号井戸（SK45）

調査区中央やや東寄りで検出した井戸である。実測図は、49ページ、Fig.43にあげている。直径約85センチの円形を呈し、検出面からの深さは93センチをはかる。ほぼ円筒形の井戸である。

出土遺物の一部をFig.21に示す。1・2は、須恵器である。1は短頸壺の蓋である。天井部中央には、ボタン状のつまみが付く。体部上面には、カキ目がみられる。2は坏身である。3～5は、土師器である。3は壺である。完形品で井戸床面から出土した。外面は、継の刷毛目調整、外底部は継の削り、口縁部内面は横撫で、頸部は撫で下ろし、体部内面は指頭で撫で上げる。4は、高壺の脚である。内面は削り調整、外面は摩減し調整痕が見えない。5は、碗である。外面下半は刷毛目調整、口縁部付近は横撫で、体部内面は撫で調整する。

これらの出土遺物から、6世紀中頃～後半の井戸と考えられる。

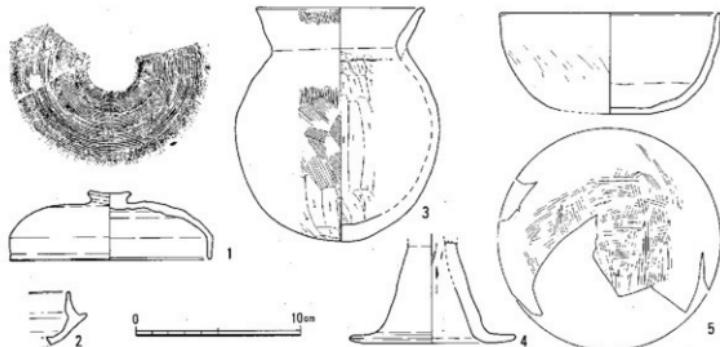
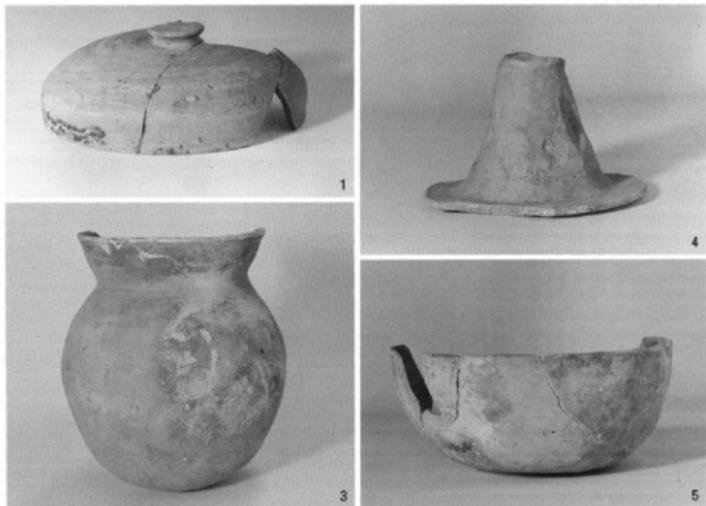


Fig. 21 45号土坑出土遺物実測図 (1/3)



Ph.10 45号土坑出土遺物（縮尺不同）

50号土坑 (SK50)

調査区中央からやや東寄よりの、微高地南縁近くで検出した。径80センチ前後の不整円形を呈し、深さ約80センチをはかる。床面から15センチほど浮いて、土師器の甕が、これにかぶさるように大型の石が、埋め込まれていた。

Fig.23 に出土遺物した土師器を示す。1は、手捏ね土器である。2は、高坏の鉢部である。内外面と



Ph.11 50号土坑出土土師器甕

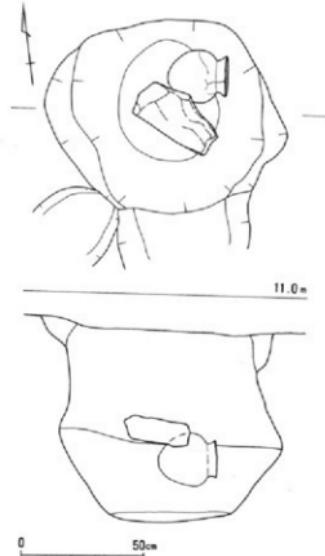
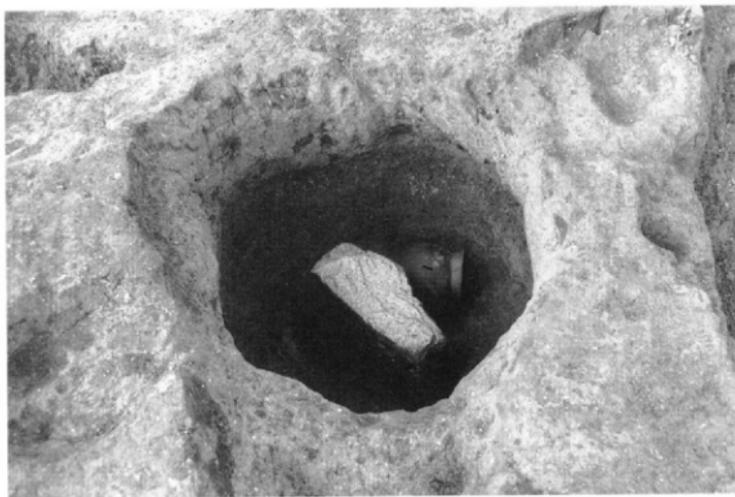
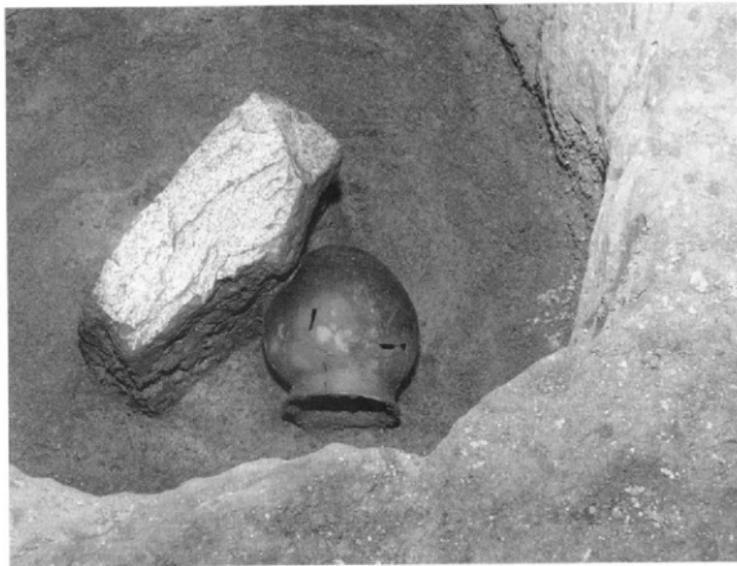


Fig.21 50号土坑実測図 (1/20)



Ph.12 50号土坑（南より）



Ph.13 50号土坑遺物出土状況（東より）

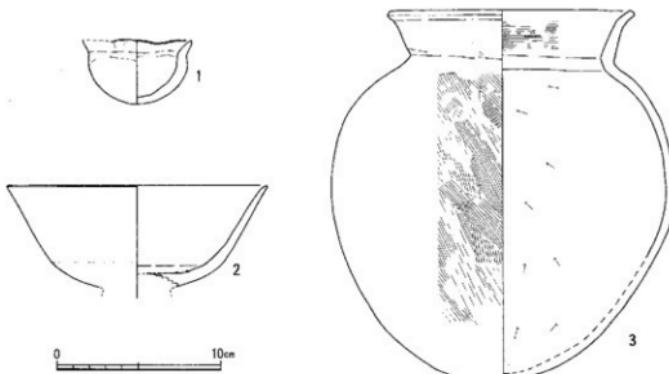


Fig. 23 50号土坑出土遺物実測図 (1/3)

もに表面が剥落し、調整痕は残っていない。3は、完形品で出土した壺である。口縁部外面は、横撫で調整、体部外面は斜め刷毛目調整、口縁部内面は横刷毛目調整、体部内面は籠削りである。

このほか、須恵器片が出土している。これらの遺物の編年観からみて、5世紀代に当てるのが妥当であろう。

51号土坑 (SK51)

調査区中ほど東寄りで、微高地の縁辺近くから検出した井戸である。

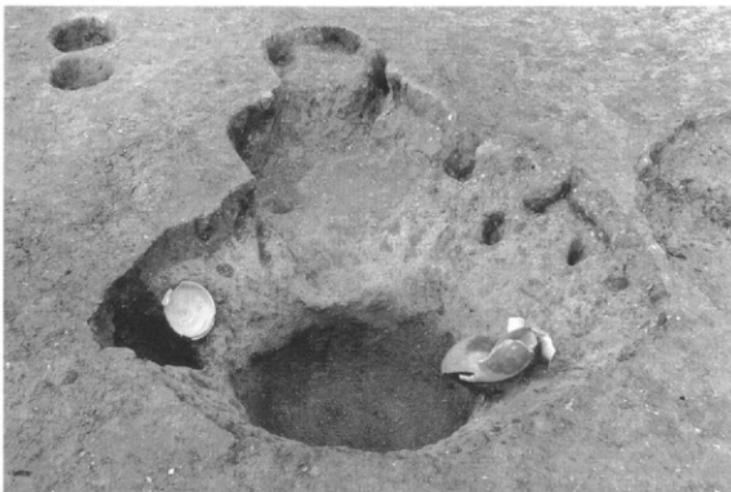
長軸125センチ、短軸100センチの卵型を呈し、深さは約70センチをはかる。ほぼ、円筒形の井戸といえる。

検山面よりも少し下がった際際に貼り付いて須恵器の壺と土師器の壺が出土した。これをFig.24に示す。1は、須恵器の壺である。内面は横撫で調整で、内底の中央付近には一回撫でを加える。外面は、口縁部から三分の一あたりまで横撫で調整、以下を回転籠削りする。2は、土師器の壺である。肩に少し張りを持った、下膨れの球胴を呈する。口縁部の内外面は横撫で調整、頸部から肩部にかけての内面は横位の籠削り、胴部内面は縦位の籠削りを行う。外面は、縦位を基調とした刷毛目調整である。

これらの出土遺物から、6世紀前半の井戸と考えられる。



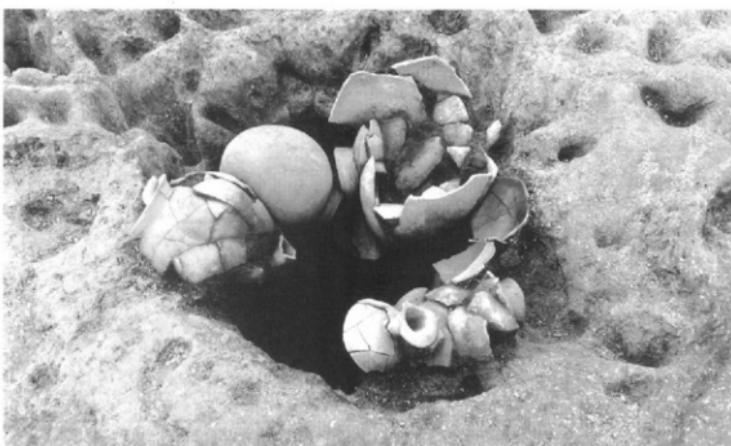
Fig. 24 51号土坑出土遺物実測図 (1/3)



Ph.14 51号土坑（南東より）

55号土坑（SK55）

調査区中央東寄り、微高地の縁辺部から検出した井戸である。
直径97~100センチの略円形を呈し、検出面から床面までの深さ約90センチをはかる円筒形の井戸
である。



Ph.15 55号土坑（北西より）

埋土の上位において、土師器がまとめて出土した。逆レンズ状に堆積して埋まりつあった途中の段階で置かれたものと推測できる。また、完形に接合できないものもあり、これについては初めから破損していたと思われる。完形で置かれた壺の口縁の方向なども一定せず、雑然とした感がある。

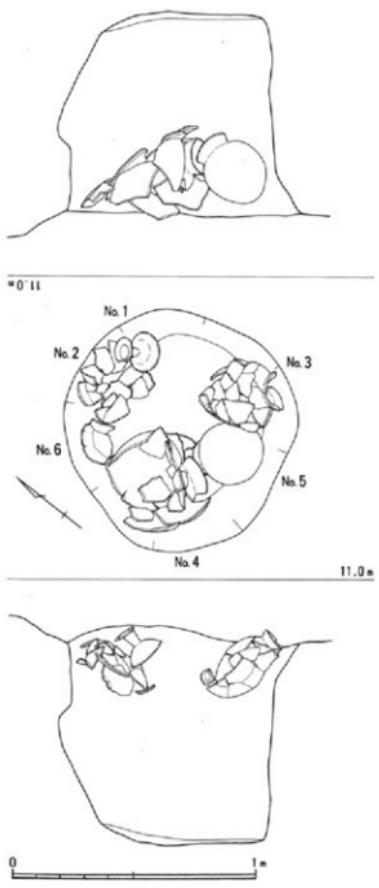
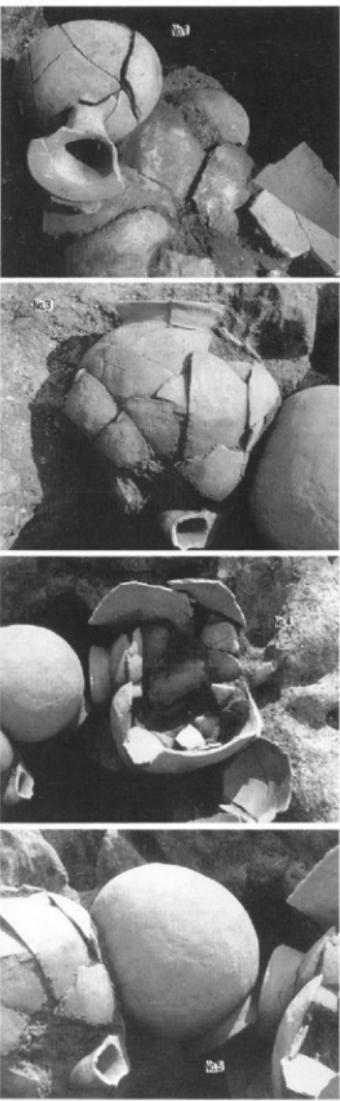


Fig. 25 55号土坑実測図 (1/40)



Ph. 16 55号土坑土師器出土状況

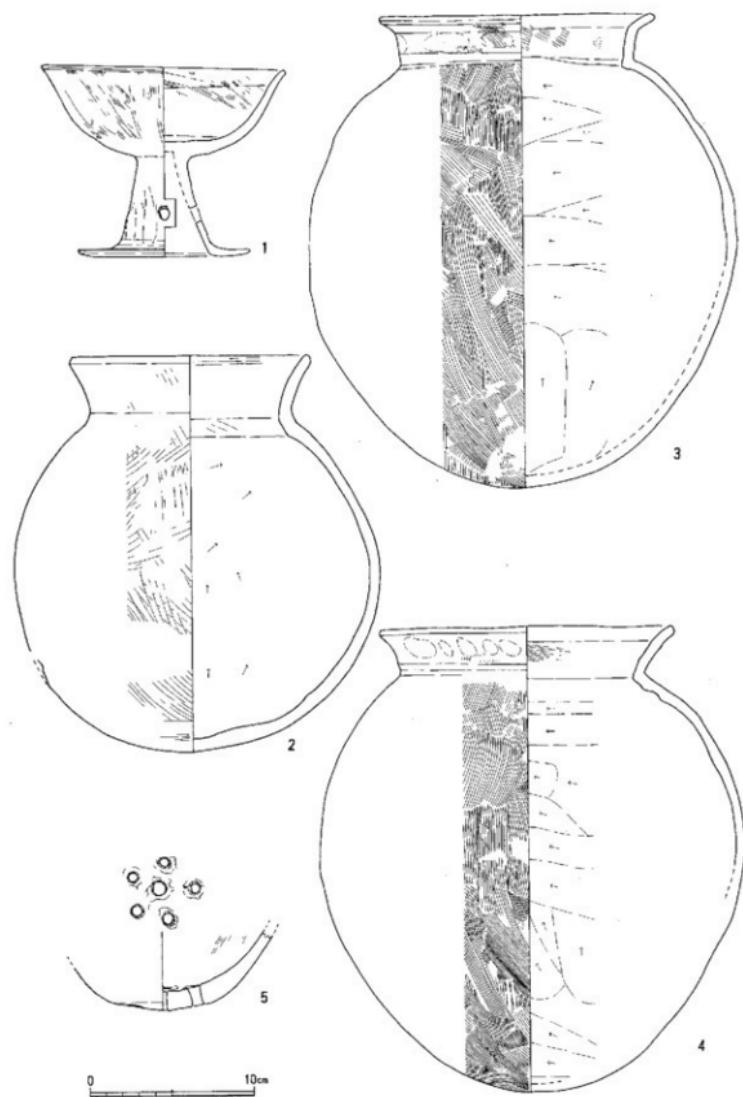


Fig. 26 55号土坑出土遺物実測図1 (1/3)

Fig.26・27 に出土遺物を示す。すべて、土師器である。1は、高坏である。坏部の内外面は、刷毛目調整される。脚の筒部分の外面は縦方向の削りをおこなう。筒部には、一对の円孔があけられている。胎土は比較的細かく、白っぽい灰褐色を呈する。焼成は若干甘い。2は、壺である。次に述べる甕に比べて、頸部が縮まり、口縁部は長く伸びる。頸部の内面の綾も甘い。口縁部の内外は、刷毛目調整に横位の撫で調整を加える。胴部外面は刷毛目調整、内面は笠削りである。灰白色を呈する。3は、甕である。まったく割れずに、完形品で出土した。頸部は、いったん直立気味に立ち上がった後、外反する。口縁部の内外面は刷毛目調整の上から横撫で調整、胴部内面は笠削り、外面は縦位の刷毛目調整を行う。砂質の強いざらついた胎土であるが、焼成は良好で、濃い茶褐色を呈する。4も甕である。口縁部は、「く」の字形に外反して開く。調整は3とほぼ同じであるが、口縁部内面の刷毛目は、撫で消されてはいない。砂質の強い胎土で、濃い茶褐色を呈する。5は、瓶の底部である。甕形土器の底部に5つの穿孔を加えている。外側からの穿孔で、内面では、穿孔によってはみ出した粘土を、軽く撫でて押さえている。胎土・焼成・色調は、3・4に共通する。6は、大型の甕である。肩が

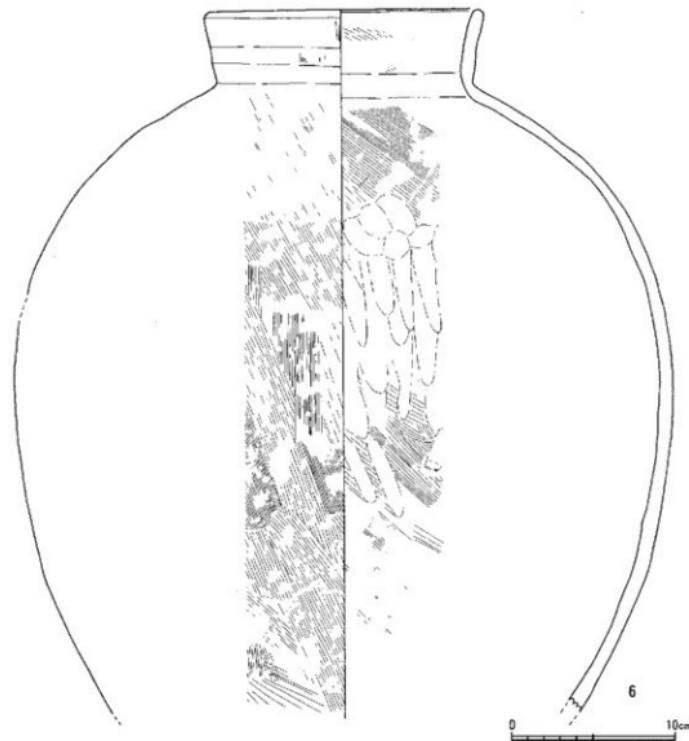


Fig.27 55号土坑出土遺物実測図2 (1/3)

張らない倒卵形の胴部で、小さく締まった頸部から直立気味の口縁部が伸びる。口縁部の内外面は、刷毛目調整の上に横撫で調整をおこなう。胴部外面は刷毛目調整である。胴部内面も刷毛目調整で、部分的に綫方向の指撫でを加える。砂質がかった胎土で、淡褐色～茶褐色を呈する。

これらのほかに弥生式土器片が出土しているが、須恵器は一点も出土していない。

以上の出土遺物からみて、5世紀前半の遺構と考えることができる。



Ph.17 55号土坑出土遺物（縮尺不同）

(4), 土 坑

本調査では、溝状遺構・柱穴以外の比較的大型の掘り込みを持つ遺構は、すべて土坑として処理した。したがって、多様な形態の遺構が含まれている。そのうち、井戸と判断されたものについては前節で報告したので、ここでは、それ以外の土坑について述べる。

土坑には、方形や長方形で箱型の断面を持つもの、長楕円形を呈するもの、不整形のものなど、多様な形態が含まれる。当然、機能も多岐にわたる筈であるが、残念ながらそこまで明らかにできた遺構はなかった。なお、長方形や長楕円形を呈する土坑には、あるいは土葬墓が含まれているかも知れないが、埋葬人骨や副葬品・供獻遺物などから、それを墓であると判断できる遺構は見あたらなかった。一応、墓はなかったものとして報告するが、形態的には、76号土坑のようにその可能性を持つ遺構もある。

01号土坑（SK01）

1区で検出した大型の土坑である。微高地が、旧河川に落ち込んだ位置に設けられているが、河道からははずれている。長軸755センチ、短軸440センチの長楕円形を呈する土坑で、深さは50センチ前後をはかる。土坑の壁の立ち上がりは緩やかで、特に東側では傾斜は弱い。

埋土の下半部は砂であり、水が入っていたことを示している。しかも、泥土はまったく見られないで、滲水していたとは思われず、水の動きがあったものと見なくてはならない。隣接する03号土坑とは接するものの、切り合い関係ははっきりせず、一連の施設として同時存在した可能性も考えられる。しかし、現時点では機能を特定できない。

Fig.29 に出土遺物を示す。1～5は、須恵器である。1は、壺蓋である。遺存した部分に関する限り、内外面ともに横撫で調整する。他の須恵器に比べて、時期的に古く位置づけられ、混入遺物とするべきである。2も壺蓋である。口縁の内側に小さい返りがつく。3・4は、高台壺である。底部から体部に転じる屈折部近くに、輪高台を貼り付ける。5は、鉢であろう。口縁は、水平に面取りされる。



Ph.18 01号土坑（北西より）

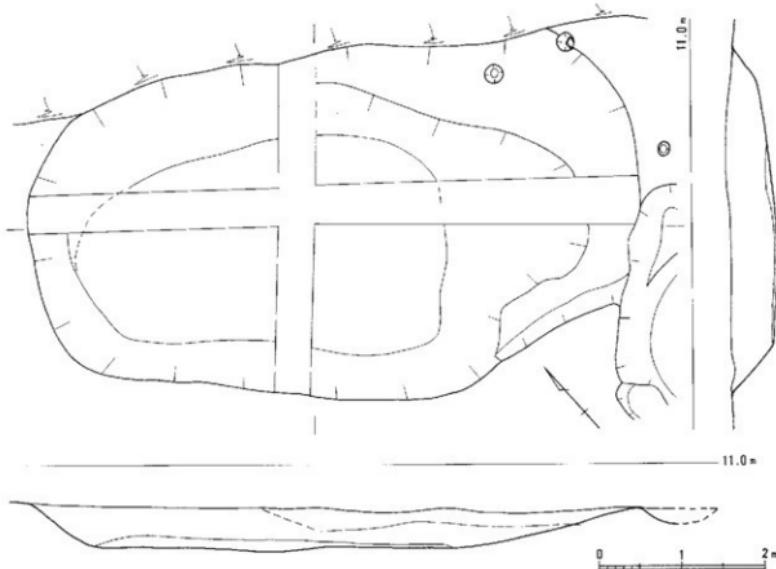


Fig. 28 01号土坑実測図 (1 / 60)

内面は横撫で調整、外面はかき目調整で、体部の中ほどに二条の沈線がめぐる。なお、内面には溶着した付着物がみられる。6は、縄文時代晚期の夜臼式土器の甌である。器壁表面には幅広の条痕がつき、刻み目突帯が貼り付けられる。

これらの遺物から、7世紀前半に比定できよう。

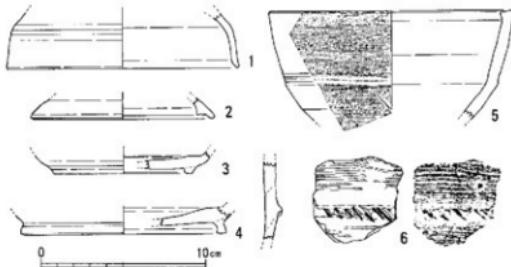
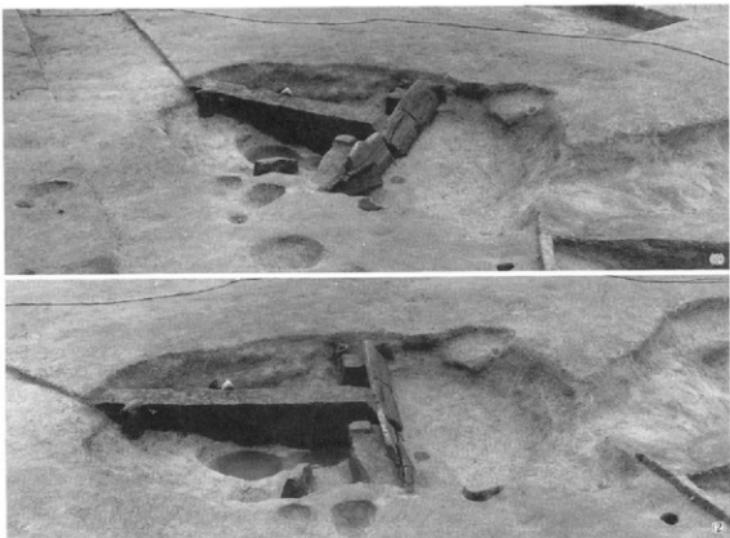


Fig. 29 01号土坑出土遺物実測図 (1 / 3)

03号土坑 (SK03)

1区で検出した土坑である。微高地が旧河川に落ち込んだ部分に位置している。長軸440センチ、短軸260センチの長楕円形もしくは隅丸長方形を呈し、深さはもっとも深いところで、50センチ前後をかる。

土坑の中央付近を横断して、板材が渡されている。板材は、幅が広いもの2枚と、幅の狭い板1枚、棒状の材1本で、これを堰状に横に並べている。表面は、北に向かって傾いており、この裏側、すな



Ph.19 03号土坑 ((1) -北より、(2) -北東より)



Ph.20 03号土坑埴状板組 (北西より)

わち南側に木杭を打ち込んで支えている。板組背面の土層は、Fig.30 に注した通りで、黒褐色粗砂がたまたま後、一度掘りなおしており、その後は、粘土が堆積している点からみて、湛水状態にあったと考えられる。板組が、01号土坑側に向いている点からみて、両者が一連の遺構である可能性は考えられるが、機能・用途は不明である。

出土遺物を Fig.31-32 に示す。1~29 は、須恵器である。1~12 は、坏蓋である。1~9 は身を受ける返りを持たないもの、10~12 は返りがつくものである。13~19 は、坏身である。18 には、脚がついて、高坏となる。

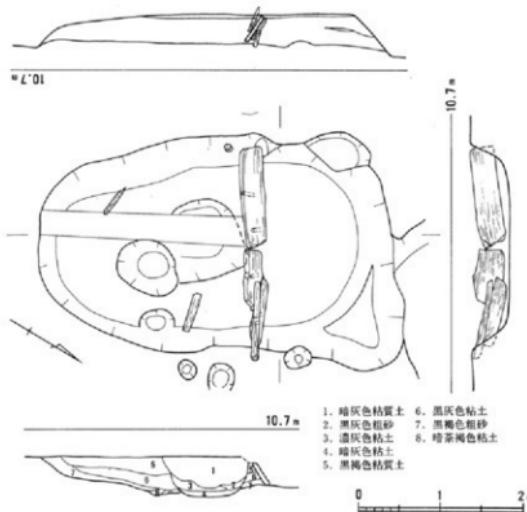
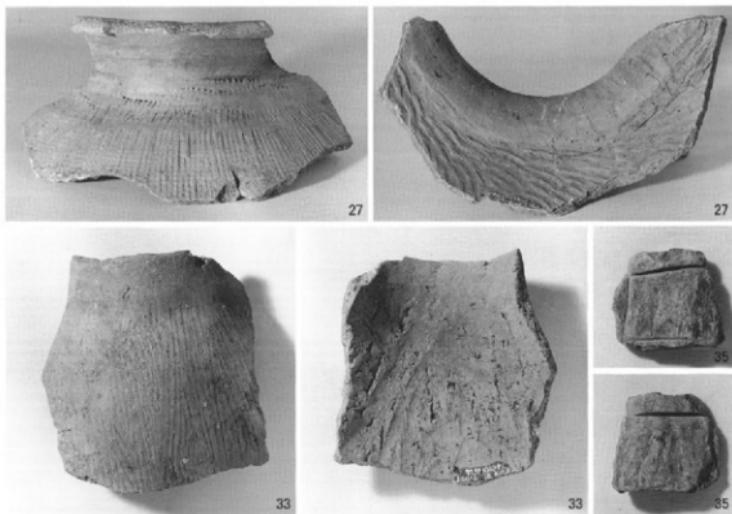


Fig. 30 03号土坑実測図 (1/60)



Ph. 21 03号土坑出土遺物 (縮尺不同)

19は、高台壺である。20は、高壺の脚であろう。21・22は、壺である。21の肩部には、二条の平行沈線の間に、櫛状工具による刺突文が並ぶ。23は、大型の高壺の壺部である。脚が剥離した痕跡が認められる。24は、壺の口縁である。25～28は、甕である。25の頸部には、自然釉がかかって見にくいが、竹管刺突状のくぼみがある。26の頸部には施記号が、27には櫛描き波状文がみられる。29は、鉢である。外面には、かき目が強く残り、二条の平行沈線が横走する。30～33は、土師器である。30は高壺で、壺部の内外面は、丁寧に鎧磨きされる。筒部は、縦方向の削りである。31～33は、壺である。口縁は、短くやや外反気味に立ち上がる。口縁部の内外は横撫で調整、胴部内面は削り、胴部外面は刷毛目調整される。34は、弥生時代前期の大型甕の口縁である。口唇部の上下端部には細かい刻み目が並んでいる。35は、滑石製品である。用途不明。

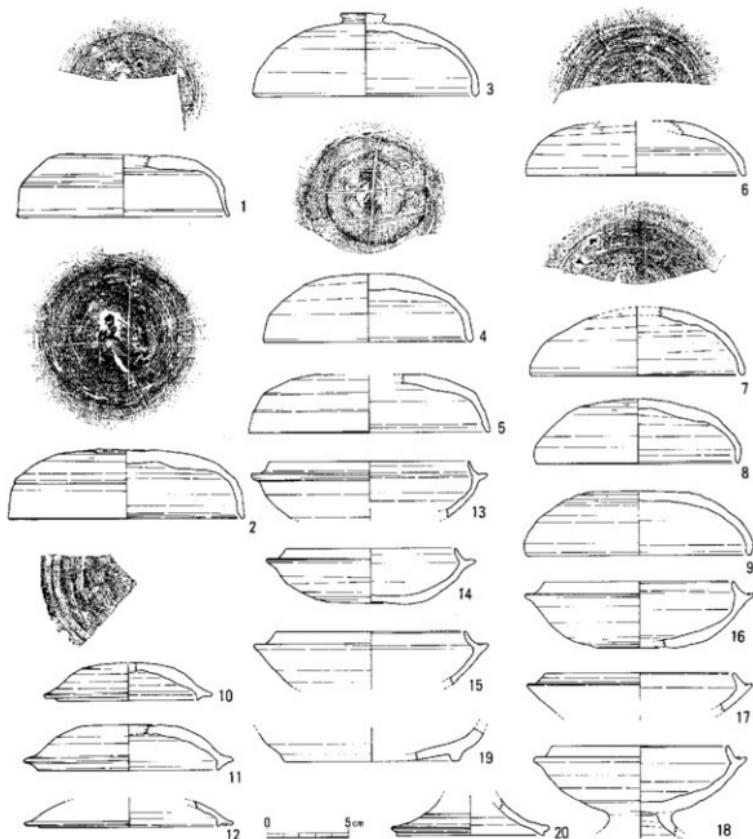


Fig. 31 03号土坑出土遺物実測図1 (1/3)

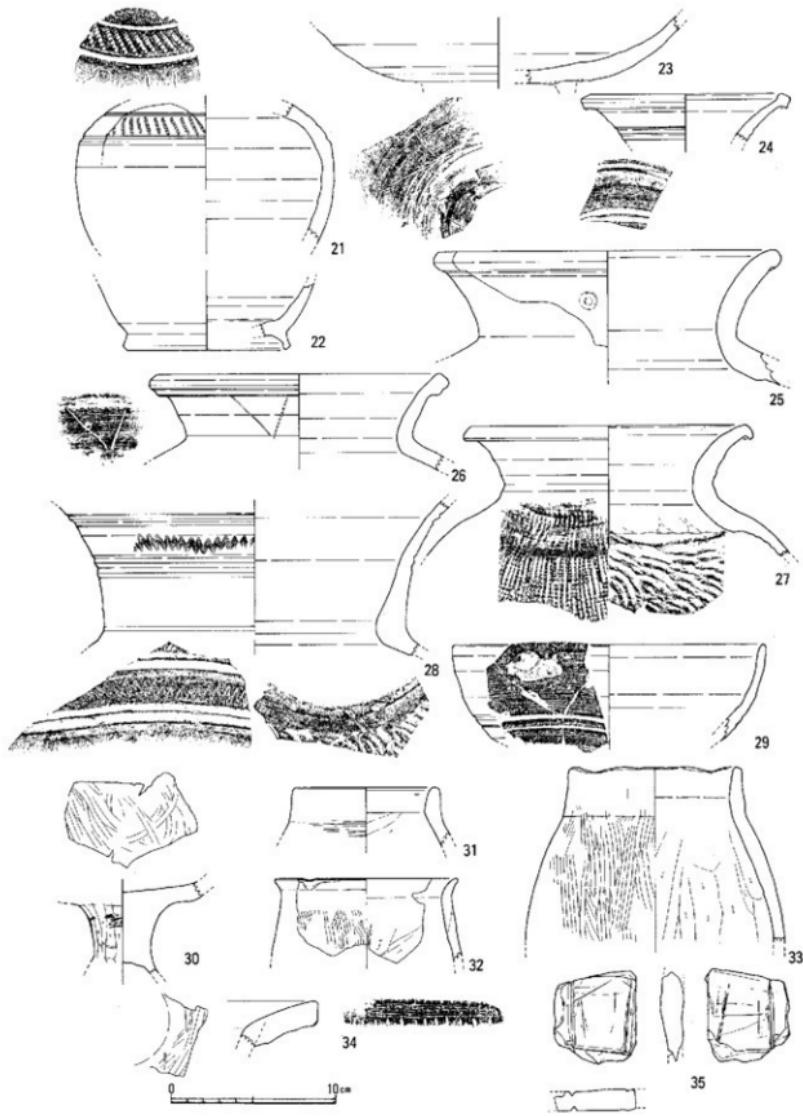


Fig. 32 03号土坑出土遺物実測図 2 (1/3)

これらの遺物を通観すると、明らかに二時期に分たれることに気づく。須恵器の壺・壺蓋でみれば、3~8の蓋と13~18の身、これに対して、10~12の蓋の相違である。新規の様相を示す遺物の量は少なく、30~33などの土師器も、前者の時期を指示している。実は、遺構実測図にみると、03号土坑の中央付近に切り込む柱穴状のビットがある。調査時にはこのビットの遺物が分離されないままになってしまった。したがって、新規の様相を示す遺物が、このビットに由来するものとしたら、03号土坑の時期は大方の遺物が示す6世紀末~7世紀初頭に落ちつくことになる。ただし、この場合、先に可能性をあげた01号土坑との同時存在は、困難となる。

05号土坑 (SK05)

1区と2区にまたがって調査した土坑である。長軸270センチ、短軸110センチ、深さ30~40センチの長楕円形の土坑であるが、形状としては整っていない。

須恵器片・土師器片が主に出土しているが、これに混じって、同安窯系青磁碗が出土しており、あるいは、中世初頭（12世紀後半頃）の掘り込みが重複した可能性も考えられる。



Ph.22 05号土坑（南西より）

09号土坑 (SK09)

1区の微高地帯で検出した土坑である。旧流路に洗われるような位置に当たる。一部に柱穴との重複がみられるが、おおむね長辺160センチ、短辺130センチの隅丸長方形を呈する。

出土遺物をFig.34に示す。1は、土師器の手捏ねの小壺である。外面には、指押さえ痕跡が並ぶ。2~5は、須恵器である。2・3は、壺蓋である。2には、口縁の内側に小さな返りがつく。3の端部は、下方に折り曲げる。4・5は、高台壺である。「ハ」の字形に開いて外方にふんばる高台を貼り付ける。いずれも底部から体部へは、丸味を持って屈曲する。

これらの出土遺物から、8世紀前半の年代が与えられるであろう。

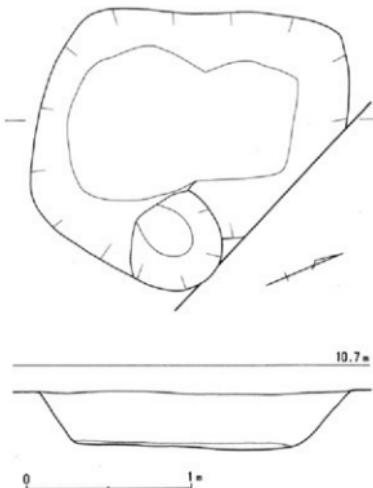


Fig.33 09号土坑実測図 (1/30)



Ph.23 09号土坑（南より）

24号土坑 (SK24)

調査区の東端近くより検出した土坑である。次に述べる25号土坑を切る。

土坑の南辺は柱穴などに切られるためほとんど形をとどめていない。しかし、他の辺から全体を推定することは可能であり、長辺220センチ前後、短辺170センチの長方形を呈し、検出面からの深さは、25センチ前後をはかる。

土師器片・須恵器片が出土しているが、小片のため時期を判断できない。

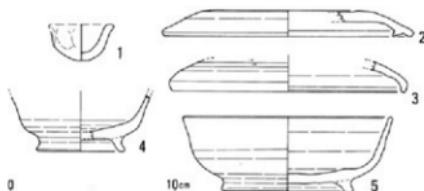


Fig. 34 09号土坑出土遺物実測図 (1/3)



Ph.24 24号土坑（南より）

25号土坑 (SK25)

調査区の東端近くより検出した土坑である。前述した24号土坑に切られる。

差し渡し120センチ前後の略円形を呈する。床面は、凹凸を持って、二段掘り状を呈し、深い部分で検出面からの深さは32センチをはかる。

土坑の東壁から、倒置した位置で、弥生時代前期の壺が出土した。Fig.36-1 がそれである。頸部の内面から、外面全面を丁寧に鏡磨きしている。頸部の縦ぎ目付近に



Ph.25 25号土坑土器出土状況（南西より）

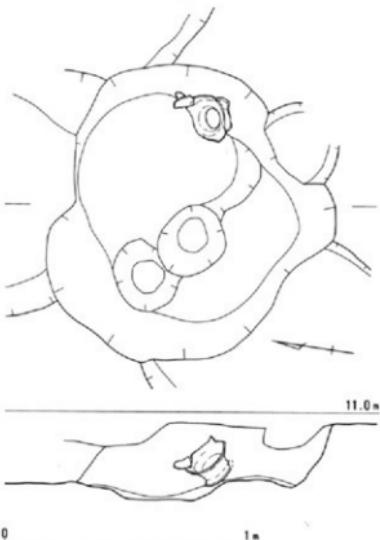


Fig.35 25号土坑実測図（1/20）



Ph.26 25号土坑（南西より）

は、指押さえの痕跡が並ぶが、胴部の内面は平滑に撫で調整される。2は、同様の壺の下半部である。体部内面は平滑に撫で調整され、外面は丁寧に笠磨きされる。このほか、縄文時代晚期の夜白式土器の壺片などが出土している。

時期を下降させる遺物はなく、弥生時代前期後半の土坑と考えて良かろう。



Ph.27 25号土坑出土遺物

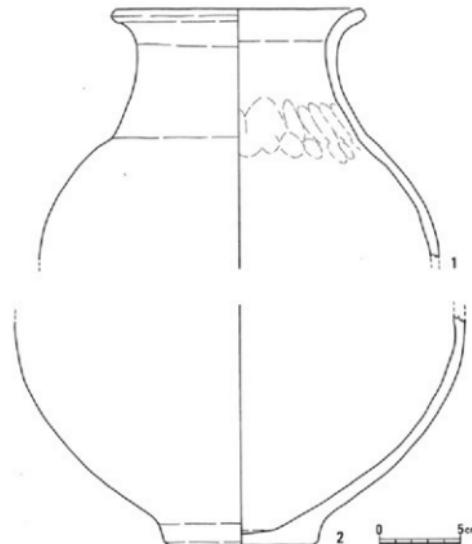


Fig.36 25号土坑出土遺物実測図 (1/3)

28号土坑 (SK28)

調査区の西角より検出した大型の土坑である。あるいは井戸かとも考えたが、ほとんど形状が知れ



Ph.28 28号土坑 (東より)

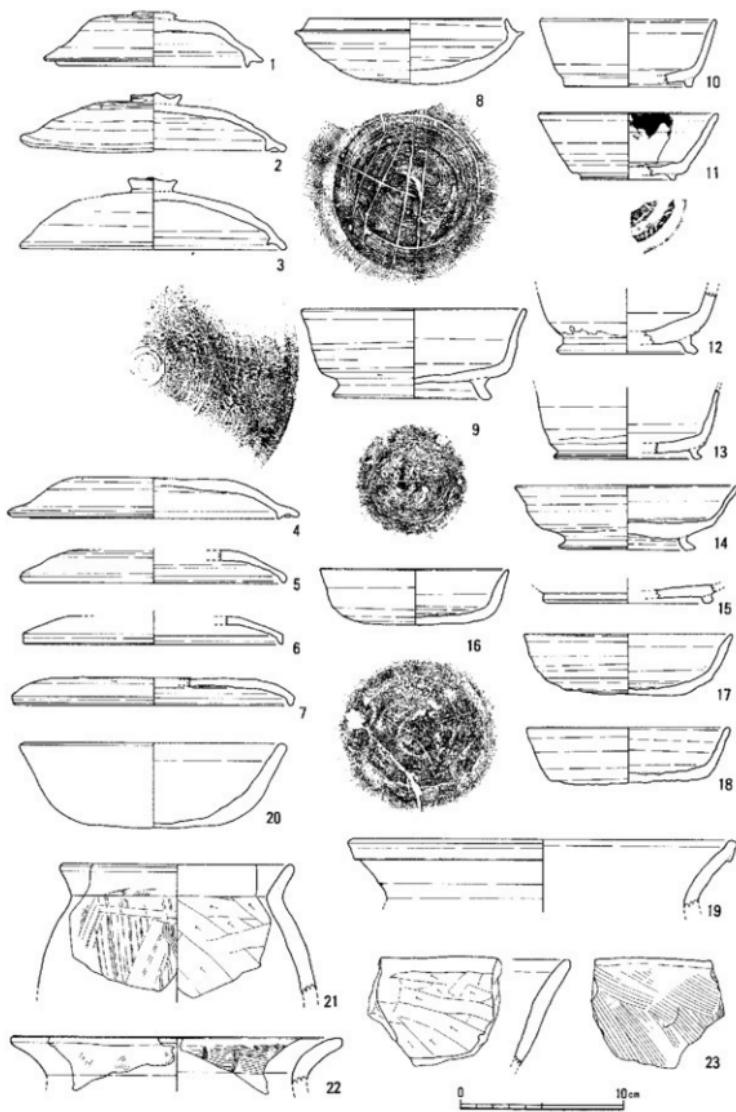


Fig.37 28号土坑出土遺物実測図1 (1/3)

ないので、判断は保留した。

出土遺物は多く、その一部をFig.37・38に図示した。1～19は、須恵器である。1～7は壺蓋である。8～18は、壺である。8は、時期的に先行する混入品である。19は、甕である。21～23は、土師器である。21・22は、甕である。23は、鉢であろうか。ただし、甕の裾部の可能性もある。24は、玄武岩の大型蛤刃石斧である。基部を欠いている。全体は敲打によって成形され、これに研磨を加えて整える。刃部には、使用による刃潰れが観察できる。本来は弥生時代の遺物であり、これも混入品といえる。

これらの遺物からは、8世紀前半の年代が与えられる。

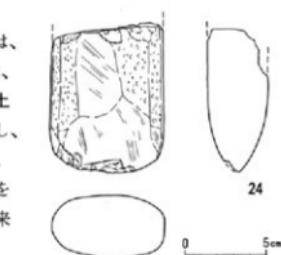


Fig. 38 28号土坑出土遺物実測図2 (1/3)

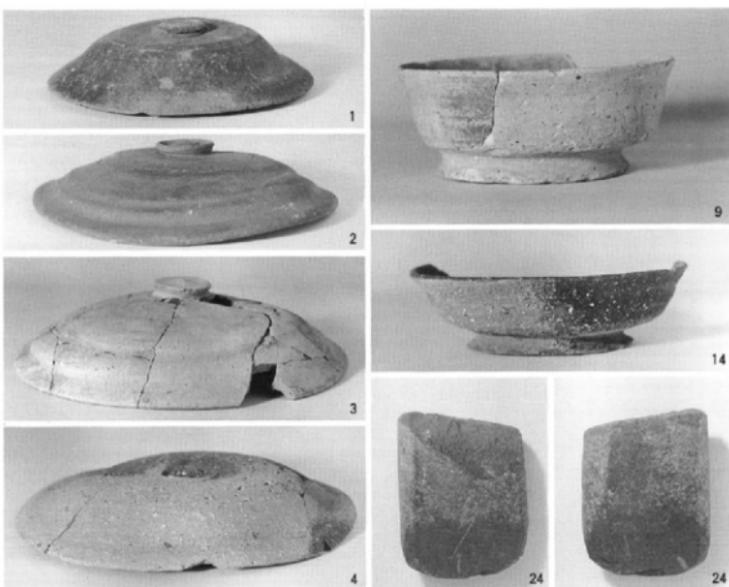


Fig. 29 28号土坑出土遺物 (縮尺不同)

30号土坑 (SK30)

調査区の北角において検出した土坑である。一部が調査区の壁にかかっているが、調査した部分から推定してこれを補うと、長辺230センチ、短辺150センチ（推定）の長方形を呈し、検出面からの深さは70センチ内外をはかる。壁面はほぼ垂直にたち、部分的に巾着状となる。床面はほぼ平坦で、断面は箱型を呈する。

出土遺物は少なく、弥生土器片と、若干の須恵器片・黒曜石片が出土している。須恵器片の出土から時期を類推する以外、時期決定可能な資料はえられなかった。



Ph.30 30号土坑（北東より）

39号土坑（SK39）

調査区中程のやや北寄り、ちょうど3号掘立柱建物跡と重複する位置から検出した土坑である。土坑自体のプランは明瞭ではなく、土器が潰れた形で出土したにすぎない。

Fig.40に出土した土器を示す。土師器の瓶である。全体に摩耗しており、調整痕は見にくい。体部外面は刷毛目調整、内面は縱方向の削りである。取っ手部分は、指撫でで成形する。

このほか、土師器・須恵器片が出土している。

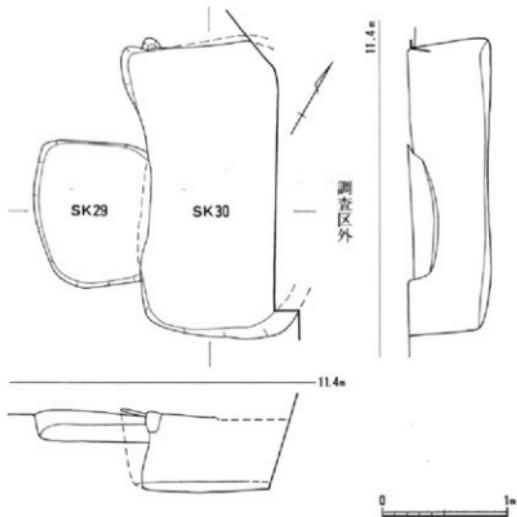


Fig.39 30号土坑実測図（1/40）

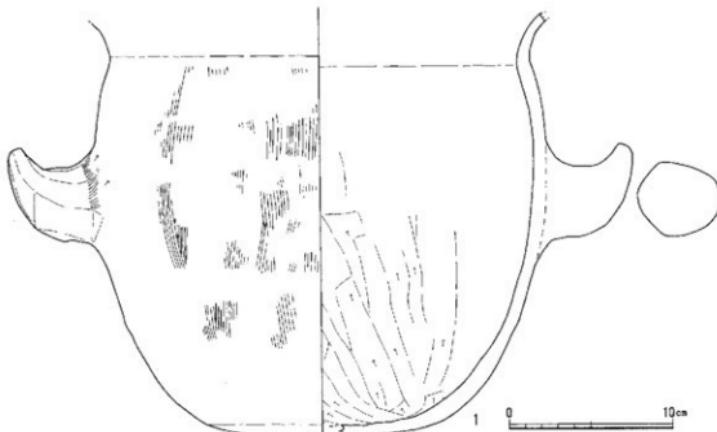


Fig. 40 39号土坑出土遺物実測図 (1/3)

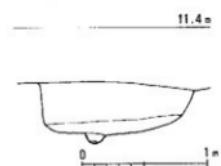
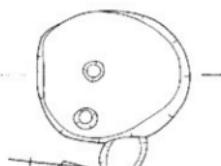
43号土坑 (SK43)

調査区中央のやや東寄りから検出した土坑である。次に述べる44号土坑に切られる。長軸128センチ、短軸110センチの卵型を呈する。検出面からの深さは、42センチをはかる。床面に2基の小ピットがみられた。直径約18センチをはかるもので、床面からは、10センチほど掘り込まれていた。43号土坑に伴うものと思われるが、その機能は明らかではない。

出土遺物をFig.42に示す。いずれも弥生式土器である。1・2は、壺である。器面は丁寧に籠磨きされる。2の頸部の付け根には、4条の平行沈線が横走する。3・4・8・9は、鉢であろう。ともに内外面とも籠磨きされる。5は、甕である。緩く外反した口縁部には、刻み目がつけられる。6は、大型壺の口縁である。籠磨きされる。7も壺であろう。10は、壺の底部である。外面は籠磨きされる。11は、甕の底部である。

このほか、縄文時代晩期の夜臼式土器の甕片が出土している。

これらの出土遺物からみて、弥生時代前期後半の土坑と見て、大過なかろう。



44号土坑 (SK44)

調査区中央からやや東寄りで検出した土坑である。長軸220センチ、短軸130センチの瓢箪形を呈する。壁は、緩く傾斜し、だらだらと床面に続く。検出面から床面までの深さは、30センチ前後をはかる。

出土遺物をFig.44に図示した。1～6は、須恵器である。1～3は、壺蓋である。頂部よりの約二分の一が回転籠削り、他は横

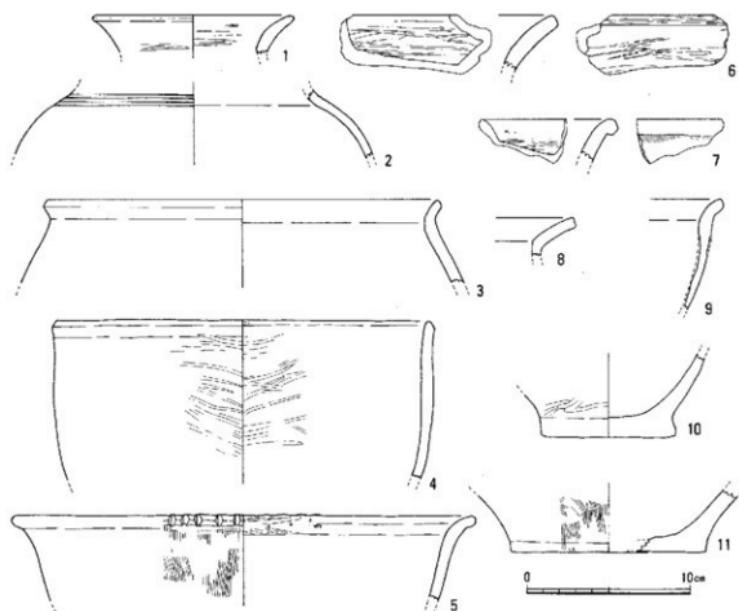


Fig. 42 43号土坑出土遺物実測図 (1 / 3)

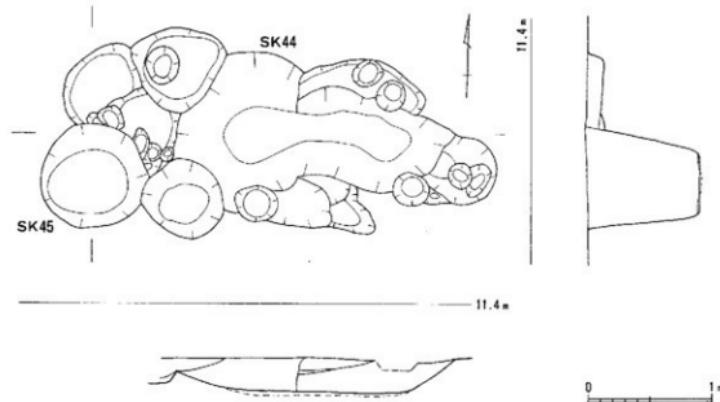


Fig. 43 44号土坑実測図 (1 / 40)

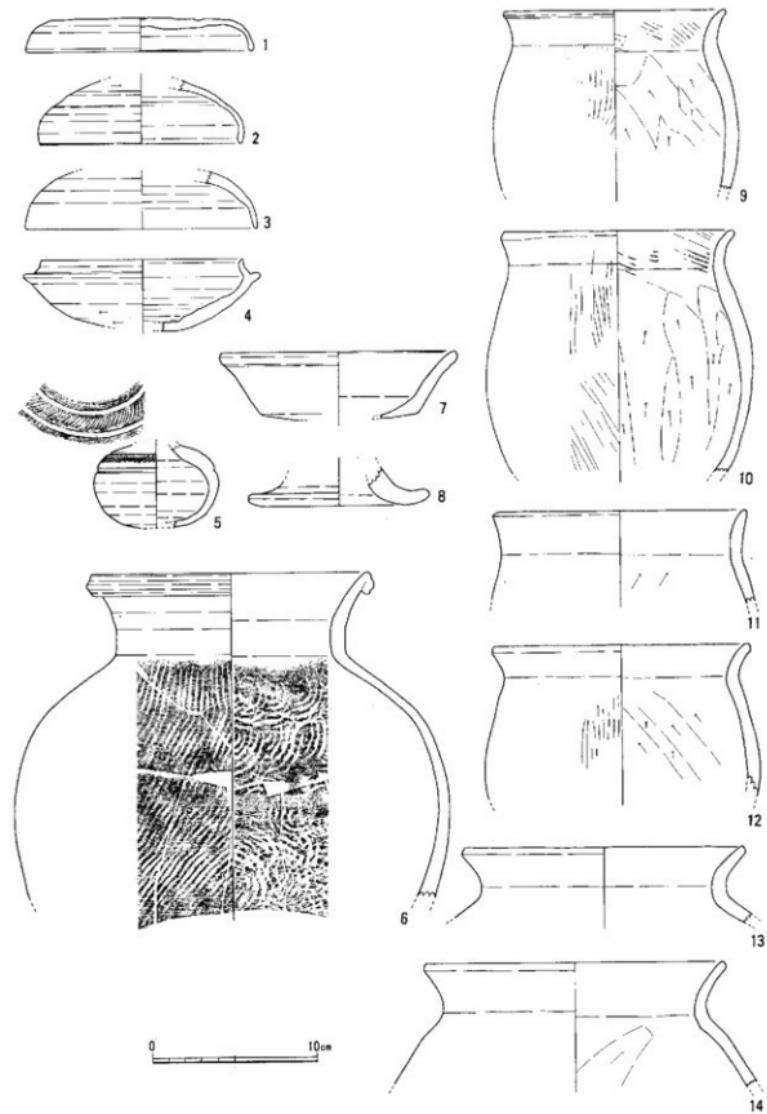
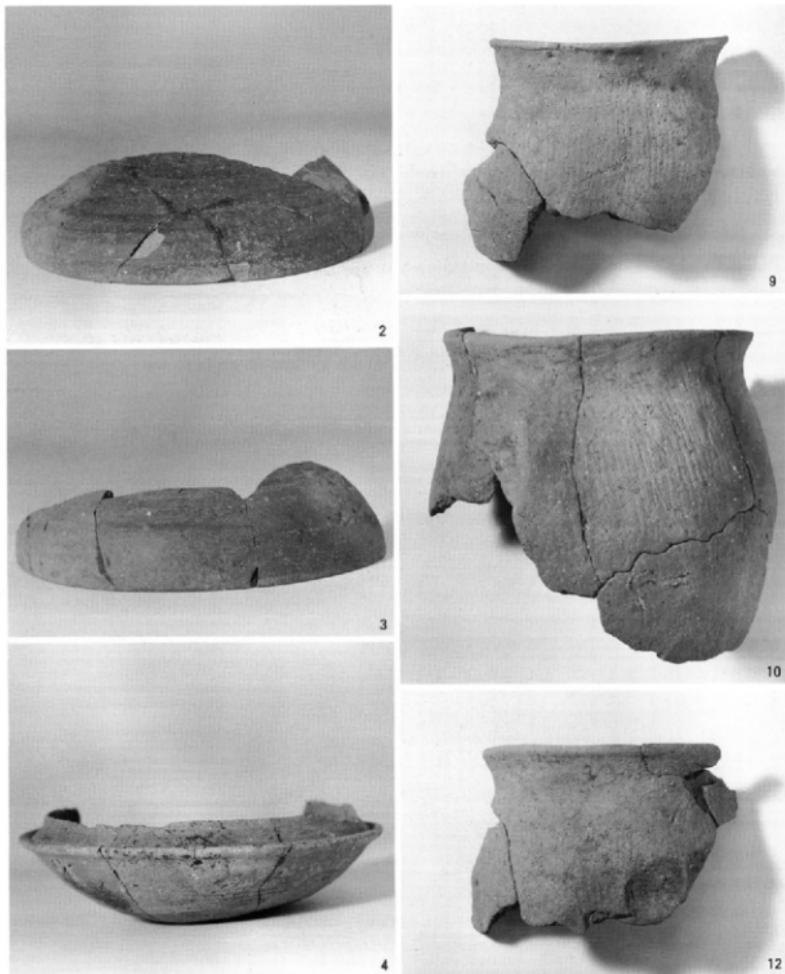


Fig. 44 44号土坑出土遺物実測図 (1 / 3)

撫で調整する。4は、坏である。5は、腹の胸部である。肩部に櫛状工具による刺突文が並ぶ。6は、甕である。7～14は、土師器である。7は、坏もしくは高坏であろう。器壁は摩耗している。8は、高坏の脚部である。内外面ともに摩耗している。9～12は壺、13・14は甕である。

このほか、黒曜石のチップが出土しているが、混入遺物である。

これらの遺物からみて、44号遺構は、6世紀末～7世紀初頭に位置づけるのが適當と考える。



Ph.31 44号遺構出土遺物（縮尺不同）

48号土坑 (SK48)

調査区中央やや東寄り、微高地の縁辺部から検出した土坑である。前述した2号竪穴住居跡と重複しており、これを切り込んで営まれている。

長辺180センチ、短辺135センチの長方形を呈し、検出面からの深さは、24センチをはかる。床面は平坦で、ほぼ箱形の土坑といえる。

出土遺物をFig.46に示した。

1・2は、須恵器の环蓋である。口縁の内側に小さな返りがつく。3は、土師器の壺である。口縁は横撫で調整、体部内面は窓削りする。

このほか、弥生式上器片が出土している。

これらの遺物から判断して、7世紀後半の土坑と考えられる。

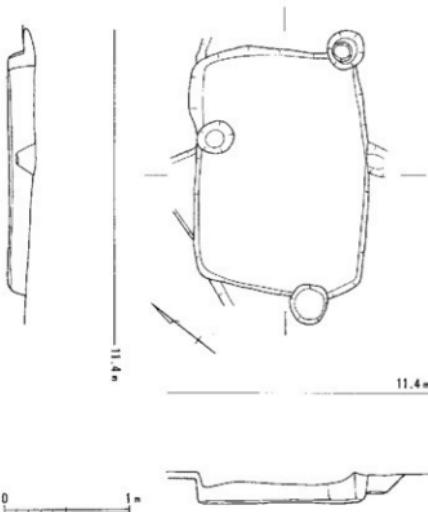


Fig. 45 48号土坑実測図 (1/40)

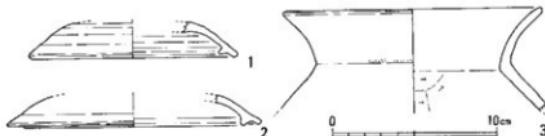


Fig. 46 48号土坑出土遺物実測図 (1/3)

56号土坑 (SK56)

調査区中程から東よりの、微高地縁辺から検出した土坑である。

長辺180～210センチ、短辺70～80センチの一部いびつな長方形を呈する。床面は平坦ではなく、中程が落ち込むように下がり、最も深いところで、検出面から38センチをはかる。

出土遺物をFig.48に図示した。1は、黒曜石の石鎚である。凹基式であるが、一方の脚と他方の脚の先端を欠く。比較的厚みがある。弥生時代の石鎚であり、混入品である。

2・3は、須恵器である。2は、高台坏である。底部と体部との境は丸味を持ち、体部は外反して

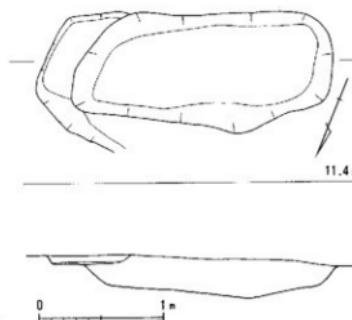


Fig. 47 56号土坑実測図 (1/40)

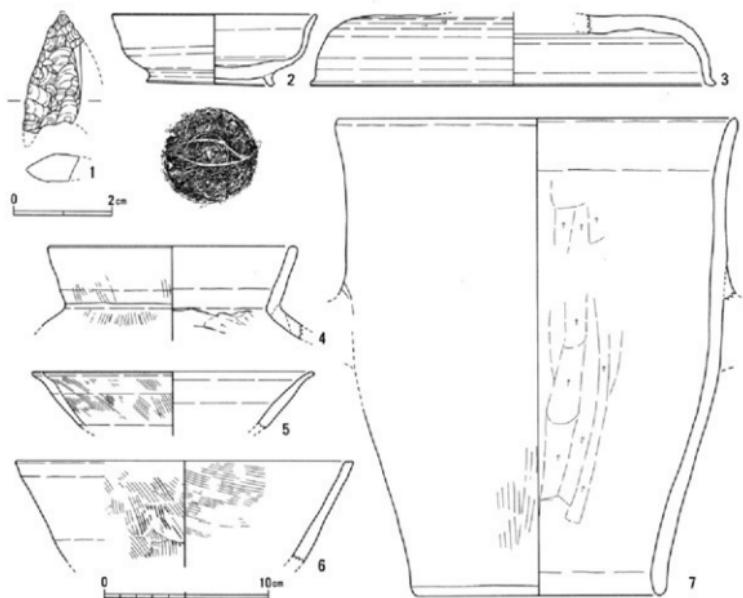
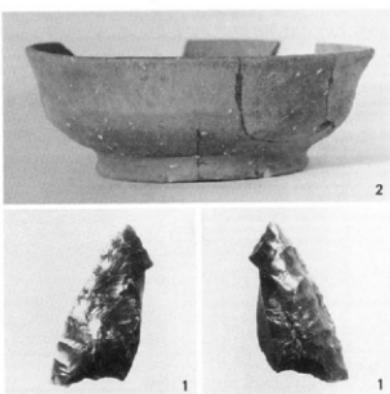


Fig. 48 56号土坑出土遺物実測図 (1/3)

立ち上がる。高台は、底部と体部の境からはかなり内側につけられている。外底部に、籠記号がみられる。3は、短頸壺の蓋である。天井部は、平坦である。天井部と体部との境は、丸味を持って屈曲している。

4～7は、土師器である。4は、壺である。口縁部の外面は横拂で調整、体部外面は継刷毛目調整、内面は籠削りする。5・6は、鉢であろうか。あるいは大型の脚の裾部かとも思うが、全体の形状が思い浮かばないので、鉢として報告する。ラッパ状に大きく開く口縁部を持つ。刷毛目で調整される。7は、瓶である。全体に摩耗して、調整は読みとりにくい。外面は継方向の刷毛目、内面は継の削りである。取っ手は、剥落している。

これらの遺物から、7世紀後半の土坑と考えられよう。



Ph.32 56号土坑出土遺物

57号土坑 (SK57)

調査区の西隅近くから検出した土坑である。

長軸235センチ、短軸100センチの隅丸長方形を呈する。床面の中央は、さらに土坑状に落ち込んでおり、別の遺構が重なっていた可能性を示すが、調査時には識別できなかった。

夜臼式土器片、弥生式土器片、黒曜石チップ、須恵器片などが出土したが、小片のため時期を判断するにはいたらなかった。

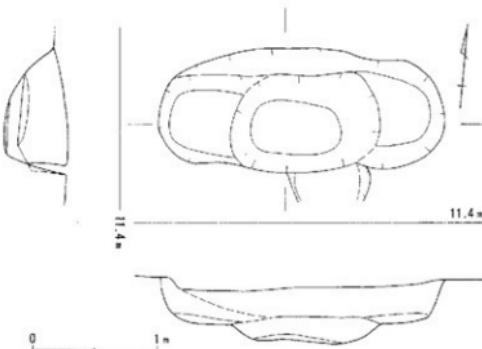


Fig. 49 57号土坑実測図 (1 / 40)

62号土坑 (SK62)

調査区中程のやや北寄りから検出した土坑である。3号掘立柱建物跡の柱穴に切られる。

長辺140～150センチ、短辺110センチの長方形を呈する。床面は平坦で、断面は箱形となる。検出面からの深さは、40センチ前後をはかる。

弥生式土器片、土師器片、黒曜石チップなどが出土している。遺物から時期を決めるにはいたらなかった。

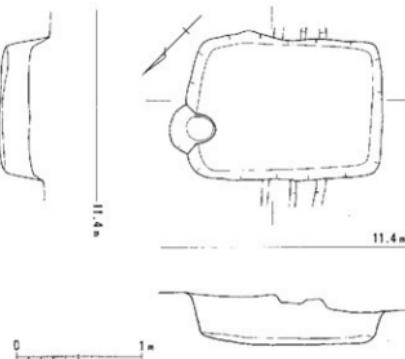


Fig. 50 62号土坑実測図 (1 / 40)

65号土坑 (SK65)

調査区の中程から、やや北寄りで検出した土坑である。

長辺220センチ、短辺160センチの隅丸

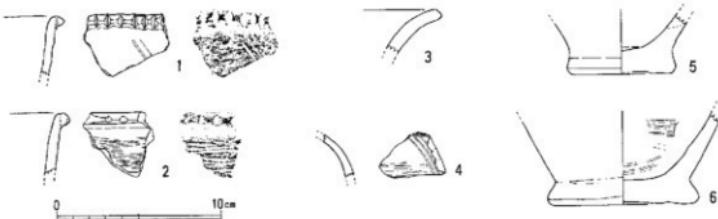


Fig. 51 65号土坑出土遺物実測図 (1 / 3)

長方形を呈する。床面は平坦で、検出面からの深さは55センチをはかる。

Fig.51 に出土遺物を示す。
1・2・8 は、縄文時代晚期の夜臼式土器の壺である。1・2 は、口縁部の破片で、口唇の外側に刻み目突帯を貼り付ける。

3・4 は、弥生時代前期の壺形土器である。3 は口縁部の破片で、器壁を研磨した上に丹を塗っている。4 は、肩部付近の破片である。器壁は丁寧に籠磨きされる。破片の上端と下端に横走する沈線が、その間に斜めに垂下する三本単位の弧線が刻まれている。

弥生時代前期までの遺物しか出土していないが、土坑の形状からみて、疑問が残る。

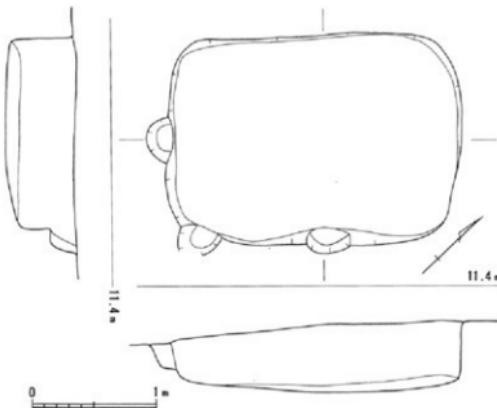
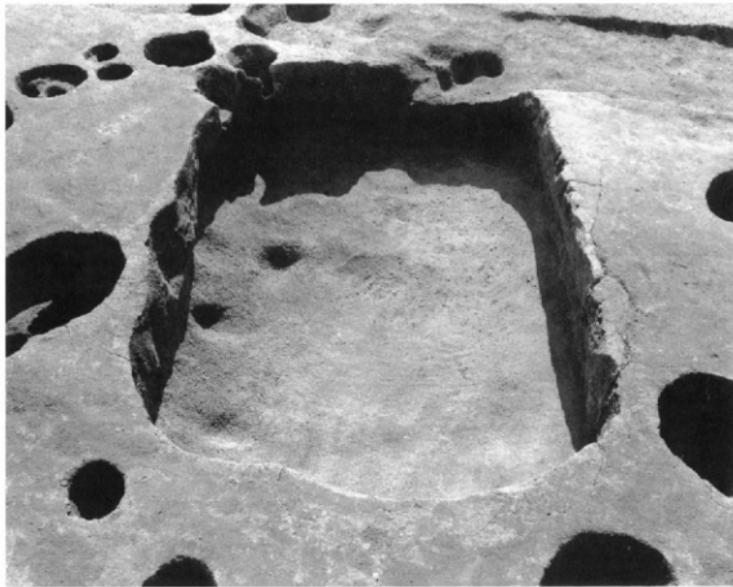


Fig. 52 65号土坑実測図 (1 / 40)



Ph. 33 65号土坑 (東より)

66号土坑（SK66）

調査区のちょうど中程から検出した土坑である。

長辺250センチ、短辺160センチの長方形を呈し、検出面からの深さは、20センチ前後をはかる。

Fig.54に出土遺物を示す。1・2・4は、壺である。1・2は口縁部で、緩く外反する。器壁は摩耗しており、調整痕跡は見えない。4は、底部である。刷毛目調整が残る。3は、高環の脚の裾部であろう。全体に摩耗するが、薄く刷毛目調整がうかがえる。5は、壺の底部である。外面は、単位こそ粗いが、密に鏡磨きされている。

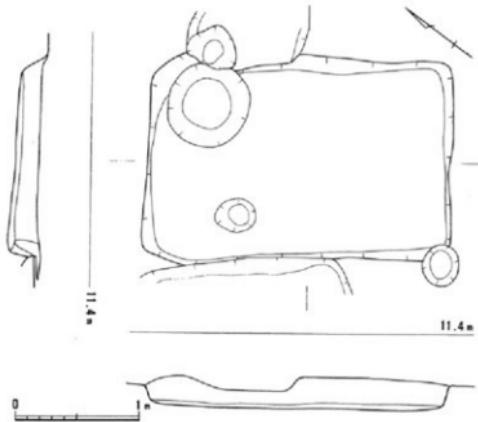
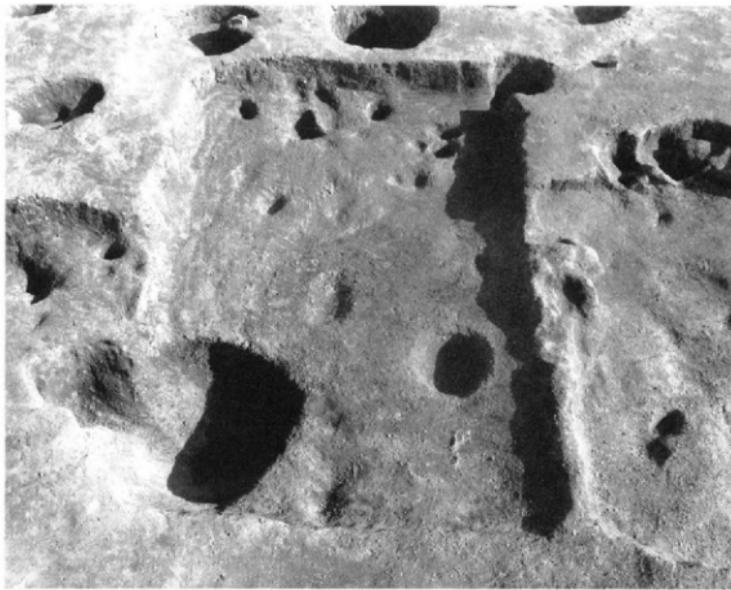


Fig.53 66号土坑実測図 (1/40)



Ph.34 66号土坑（北西より）

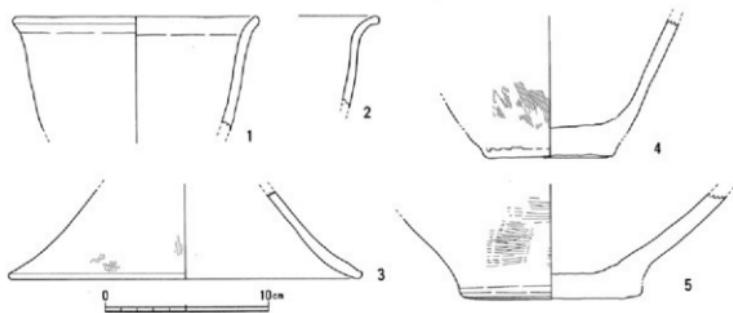


Fig. 54 66号土坑出土遺物実測図 (1/3)

これらのはかに、土師器片・須恵器片が出土している。遺構の年代としては、須恵器の示す時期であろうが、小破片のため時期を判別するにはいたらなかった。

69号土坑 (SK69)

調査区の中程、前述した66号遺構と壁を接して検出した土坑である。長辺170センチ、短辺130センチ程度のややいびつな長方形を呈する。

東壁の一部に白色粘土の塊がみられるが、機能・用途は不明である。



Ph.35 69号土坑 (南西より)

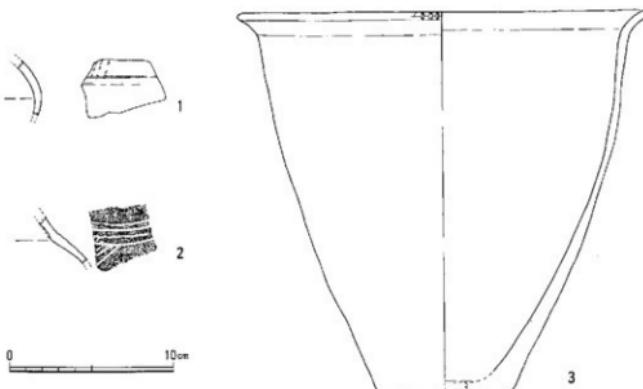


Fig.55 69号土坑出土遺物実測図 (1/3)

Fig.55に出土遺物を示す。いずれも弥生時代前期の土器である。1は、壺の胴部である。やや摩耗気味であるが、鎧磨きした上に、黒色の顔料で、文様を描いているのがうかがえる。2も壺の胴部である。肩から、頸に転じる部分の破片で、四本の横走する平行沈線と、これから斜めに下る沈線とが見える。3は、壺である。緩く外反した口縁の端部に、刻み目をいれる。

出土遺物からみて、弥生時代前期とするのが妥当であろう。しかし、整った長方形または方形を呈する土坑は、7世紀代に下るものがあり、またこれらはその方向を一にしている。したがって、本土坑もその形状などからすると、弥生時代と見ることには疑問が残る。

このほか、多数の土坑を検出したが、紙数の関係から割愛する。

(5) 溝状遺構

本調査では、細長く統一して検出された遺構については、土坑ではなく、溝状遺構として遺構番号をつけ、登録した。したがって、排水溝状に長く伸びるものもあれば、一定範囲内で中断してしまうものも含まれている。

また、明らかに後世の所産と判明したものについては、当初から対象とせず、よって遺構番号も冠していない。微高地部分と急流路部分を区別するように東から西へ掘られている溝がそれに当たる。この溝は、幅200~300センチをはかるもので、近代以後の掘削にかかる。

このようにして、溝状遺構として登録した遺構は、21基に上る。以下、その概要を報告する。

1号溝状遺構 (SD01)

調査区の東辺に沿って検出した遺構である。長さ4.3メートル余りにわたって確認した。幅は、最も狭い部分で約20センチ、最も広い部分で70センチをはかる。区画のための溝であろう。

特に遺物は出土していない。

2号溝状遺構 (SD02)

1号溝状遺構の北端から直角に折れて、東に伸びる小溝である。しかし、発掘調査の結果、7号溝状遺構の一部と区別がつかなくなってしまった。検出時の観察に従えば、長さ1.5メートル以上、幅20センチ程度をはかる。須恵器の壺の破片が出土しており、それに従えば、6世紀後半の遺構となる。

3号溝状遺構 (SD03)

調査区の東端近くを、東西に通る溝である。一部断続的ではあるが、8メートル程度にわたって、検出している。幅は、30~50センチである。土師器の高壺、須恵器の壺蓋などが出土しており、6世紀末~7世紀初頭にあてられる。

4号溝状遺構 (SD04)

3号溝状遺構のすぐ南に、ほぼ平行して検出した溝である。延長6.1メートルで、幅は約20センチである。弥生式土器・土師器にまじって、白磁IV類碗が出土している。この白磁碗が混入でないとすれば、溝の時期は12世紀代まで下ることになる。ただし、平行して検出されている他の溝の時期を勘案すれば、白磁碗の時期まで下るのは困難である。

5号溝状遺構 (SD05)

調査区の東端付近で、IH流路に向かって検出した南北方向の溝である。長さ3メートル、幅50センチをはかる。はたして、溝と見ることが適當かどうか疑問が残る。土師器・須恵器などが出上している。小片のみだが、一応、須恵器の壺蓋の形態から、7世紀前半が考えられる。

6号溝状遺構 (SD06)

欠番

7号溝状遺構 (SD07)

調査区の北側で検出した東西方向の溝である。延長12メートルで、幅40センチ前後をはかる。東端

は、さらに調査区外に続いている。

土師器・須恵器などが出土しており、その一部を Fig.56 に示す。

1～4 は、須恵器である。1・2 は、蓋である。頂部側の約二分の一ほどを回転鎔削り、他を横撫で調整する。3 は、坏身である。蓋を受ける返りが短く立つもので、底部側の二分の一が回転鎔削り、他の部分を横撫で調整する。4 は、壺である。口縁部は横撫で調整、体部内面は円形叩き、外面は平行叩きである。5 は、土師器の壺である。口縁部は横撫で調整、体部内面は鎔削り、外面は縱方向に刷毛目調整を施す。

これらの遺物から、6 世紀末から 7 世紀初頭の溝と考えられよう。

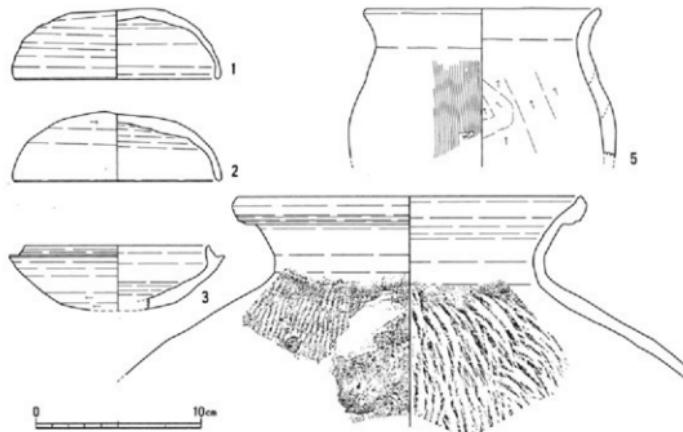
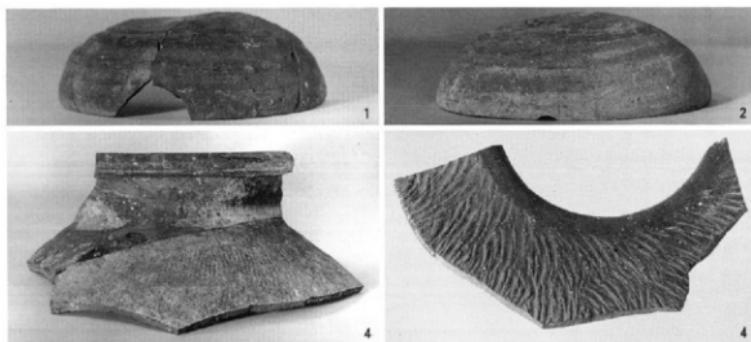


Fig. 56 7号溝状遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 36 7号溝状遺構出土遺物 (縮尺不同)

8号溝状遺構（SD08）

7号溝状遺構の途中から、鋭角に突き出すように検出した溝である。検出時には、7号溝状遺構に切られた遺構として認識していた。長さ2.1メートル、幅50センチをはかる。土師器片・須恵器片が出土しており、須恵器の坏からすると6世紀後半に位置づけられる。

9号溝状遺構（SD09）

7号溝状遺構のすぐ北で、これと平行して検出した溝である。長さ8.5メートルを調査しているが、東は調査区外に伸びている。幅40~60センチをはかる。土師器・須恵器片が出土しており、6世紀末から7世紀初頭に当たる。

10号溝状遺構（SD10）

欠番

11号溝状遺構（SD11）・12号溝状遺構（SD12）

9号溝状遺構の北側で、これと平行して検出した溝で、西側はほぼ直角に折れ曲がって、12号溝状遺構となる。11号溝状遺構で長さ4.5メートル以上、12号溝状遺構で3メートルをはかる。それだから、須恵器片・土師器片が出土しており、6世紀末から7世紀初頭として大過なかろう。

13号溝状遺構（SD13）

12号溝状遺構の西に平行して検出した溝である。浅くて幅が広く、溝状遺構と見るには、若干疑問も残る。延長4メートル、幅1.2メートルをはかる。須恵器片・土師器片が出土しているが、時期を判断するに足る資料は得られていない。

14号溝状遺構（SD14）・15号溝状遺構（SD15）

調査区中程を北西から南東に通る溝である。灰色の砂質土を埋上としており、新しい時期のものと予想された。出土遺物には、近世の肥前系陶磁器の破片が含まれており、近世の水田に伴う溝と考えられる。

16号溝状遺構（SD16）

調査区中程の微高地沿いに検出した溝である。前述した55号土坑（井戸）を切る。長さ13.8メートルにわたって検出している。土師器片・須恵器片などが出土しており、須恵器の高台坏・土師器の高台坏などからみて、7世紀後半~8世紀前半における。

17号溝状遺構（SD17）

調査区中程からやや西寄りを、北西から南東に通る溝である。延長にして8.3メートル分を調査した。幅は、50センチ前後をはかる。1号掘立柱建物跡・101号土坑などに切られる。須恵器片・土師器片などが出土しており、7世紀代の溝といえよう。

18号溝状遺構（SD18）

調査区の中央付近を、北側から旧河川に向かって下る溝である。長さ5.3メートル、幅60センチを

はかる。須恵器片が出土しており、壺破片によれば、6世紀後半に当たられる。

19号溝状遺構 (SD19)

18号溝状遺構に平行して、その東側から検出した溝である。長さ5.5メートル、幅50~60センチをはかる。土師器片・須恵器片が出土している。Fig.56-1に示した須恵器の蓋は、ほぼ完形で出土した。2は、須恵器の高台壺である。遺物の中では、もっとも後出するもので、7世紀後半~8世紀と考えられる。

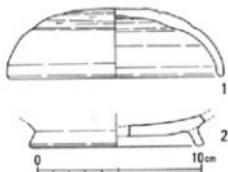
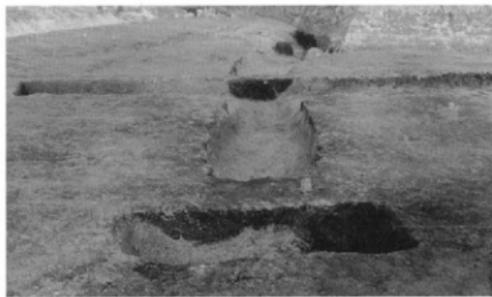


Fig. 56 19号溝状遺構遺物実測図

20号溝状遺構 (SD20)

1号竪穴住居跡の周溝にあたる。



Ph. 37 21号溝状遺構 (西より)

21号溝状遺構 (SD21)

調査区東寄り、旧河川に降りた部分から検出した溝である。東側は、調査区外に続く。また、西側は旧河川に洗われて消失している。

Fig.58-1~9は須恵器、10~

13は、土師器である。これらの遺物からみて、8世紀後半の溝と考えられる。

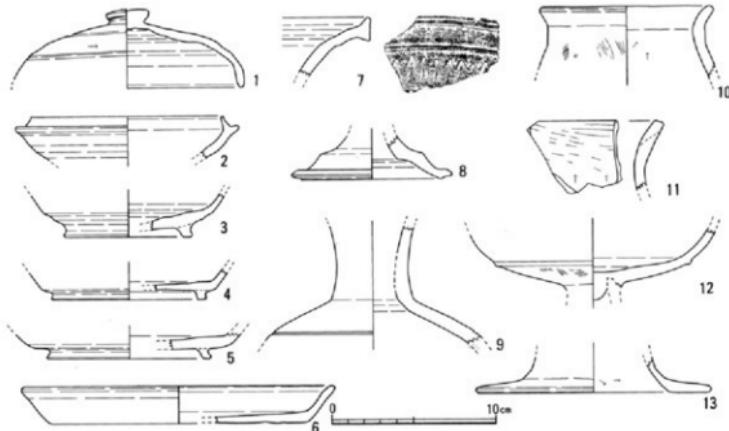


Fig. 58 21号溝状遺構出土遺物実測図 (1/3)

(6) 旧河川

前述したように、今回の調査では、調査区の南半分から、河川の流路跡が出土した。旧流路は、3条あり、北から1号流路、2号流路、3号流路とした。

1号流路は、もっとも浅い流路で、調査区の西端付近で落ち込み状に検出したにすぎない。この落ち込みの位置からみて、1号流路は、2号流路の途中ちょうどグリッド2のあたりから北に流れを振ったものと考えられる。

2号流路は、旧流路部分の真ん中を西流する。流路の底は深く、各トレンチでも底面までは達しなかった。流路の幅は、16~20メートルをはかる。

3号流路は、2号流路の南側にわずかにのぞいた流路である。

これらの流路からは、大量の遺物が出土している。土器としては、縄文時代晩期の夜臼式土器から、8世紀後半の須恵器・土師器に及ぶ。また、木製品が出土している。木製品は、時期を示す根拠にかけるが、板塔婆片など、中世に下ることが確実と思われるものが含まれており、流路の時期の下限を示している。

Fig.59~62に出土遺物の一部を図示した。1~8は、縄文時代晩期の夜臼式土器の壺である。いずれも、体部外面には条痕を持ち、口縁端部に刻み目突帯を貼り付ける。

9~19には、弥生時代前期の有文壺を集めた。いずれも丁寧に鏡磨きした器面に沈線を刻む。9・10の羽状文および18・19の領文は、二枚貝の腹縁による。20・21は、壺の底部である。外底に木葉の圧痕を持つ。22~24は、彩文土器である。いずれも壺である。22・23は赤色顔料で、24は黒色顔料で線文を描く。

25~30は、須恵器である。25・26は小型の高台壺、27は短頸壺で、トレンチ4の南端から完形で出土した。27の底部には、範記号がみられる。29は蓋、30は壺である。30は内底部に範記号を持ち、外底部は幅の狭い小口状の工具で多方向から擦られている。

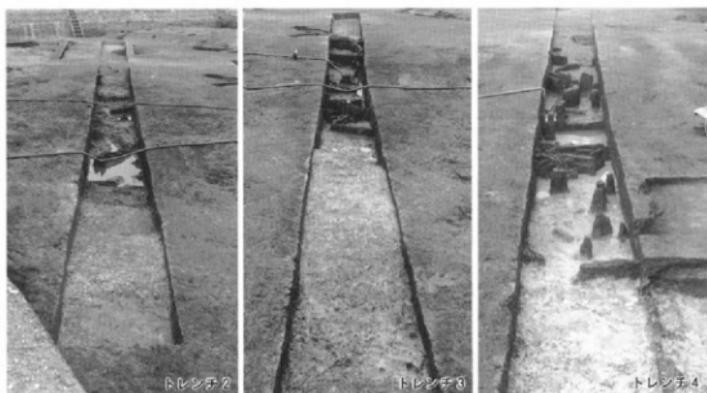
31~33は、碧玉製の管玉である。31は、半割した破片であるが、両側から穿孔した様子が良く見て取れる。34は、安山岩製の石錐である。35~39は、黒曜石製の石鏃である。40は、滑石製の勾玉未製品であろう。41は、貞岩製の扁平片刃石斧である。丁寧に研磨して整形しているが、一部に石肌と剥離面をとどめている。42は、安山岩製の石斧である。43は、堆積岩製の蛤刃石斧である。44~46は、滑石製の紡錘車である。46には、両面に月星形の印文が5つずつ打たれている。

Fig.61・62は、木製品である。1は、櫛である。ほぼ完形品である。漆はかけられていない。2は、弓苦状木製品である。全体を丸く面取りした後、3列の溝を切る。3は、棒状の木製品である。全体は菱形に面取りされる。両端は、ほぞ状に削り出す。4は、鍼の未製品である。粗い削りではぼ成型を終えているが、柄つばは未穿孔である。全長63.5センチに及ぶ長いもので、折損したために加工を放棄したものであろう。5は、曲げ物の底板である。体部を縫じ付ける桜の皮が残っている。表裏面には細かい刃物傷が無数にみられる。組板替わりに用いられた物であろう。6は、櫛である。一方の小口側の半分しか残っていない。小口には、角状の張り出しがつくられている。7は、板塔婆の破片である。釘穴が3カ所みられ、中央の穴には、木釘が詰まっている。8は、船形木製品である。粗い削りで成形される。9は、板状木製品である。両端を棒状に削りだしている。

なお、今回の調査では、金属製品は出土しなかった。



Ph.38 トレンチ1、2号流路化側岸（東より）



Ph.39 旧流路トレンチ（南より）



Ph.40 1区グリッド6（西より）



Ph.41 2号流路北側岸（トレンチ3、東より）



Ph.42 2号流路南側岸（トレンチ3、東より）

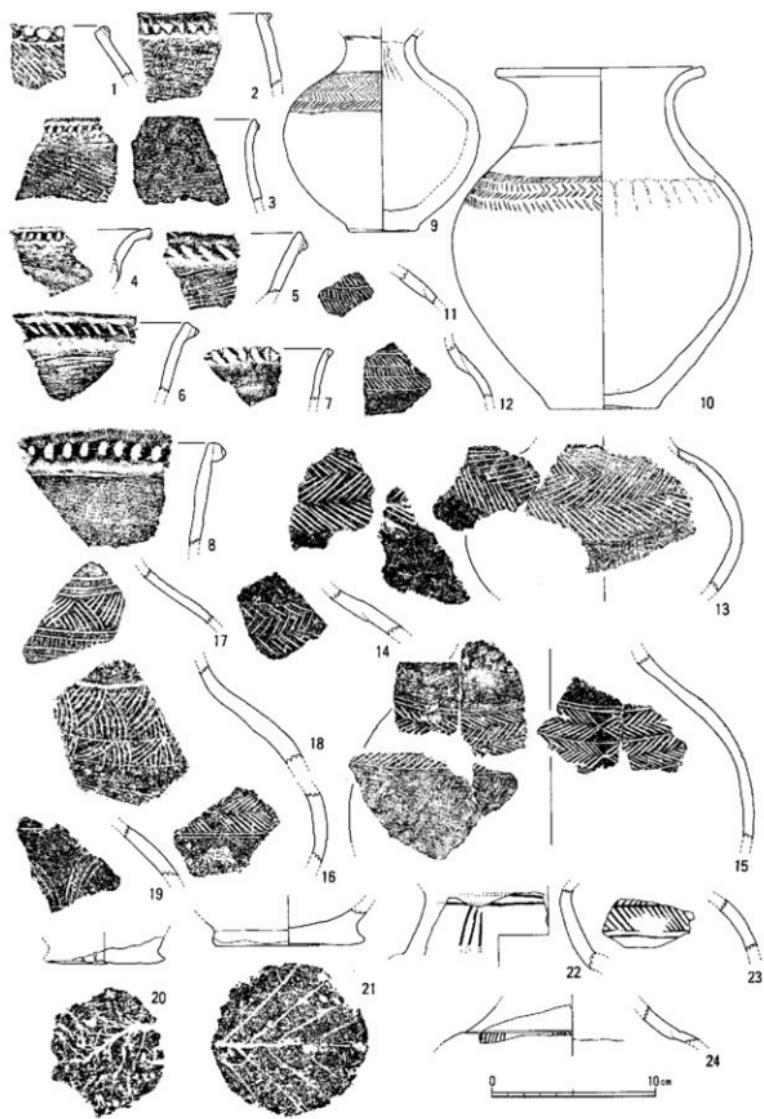


Fig. 59 旧流路出土遺物実測図1 (1/3)

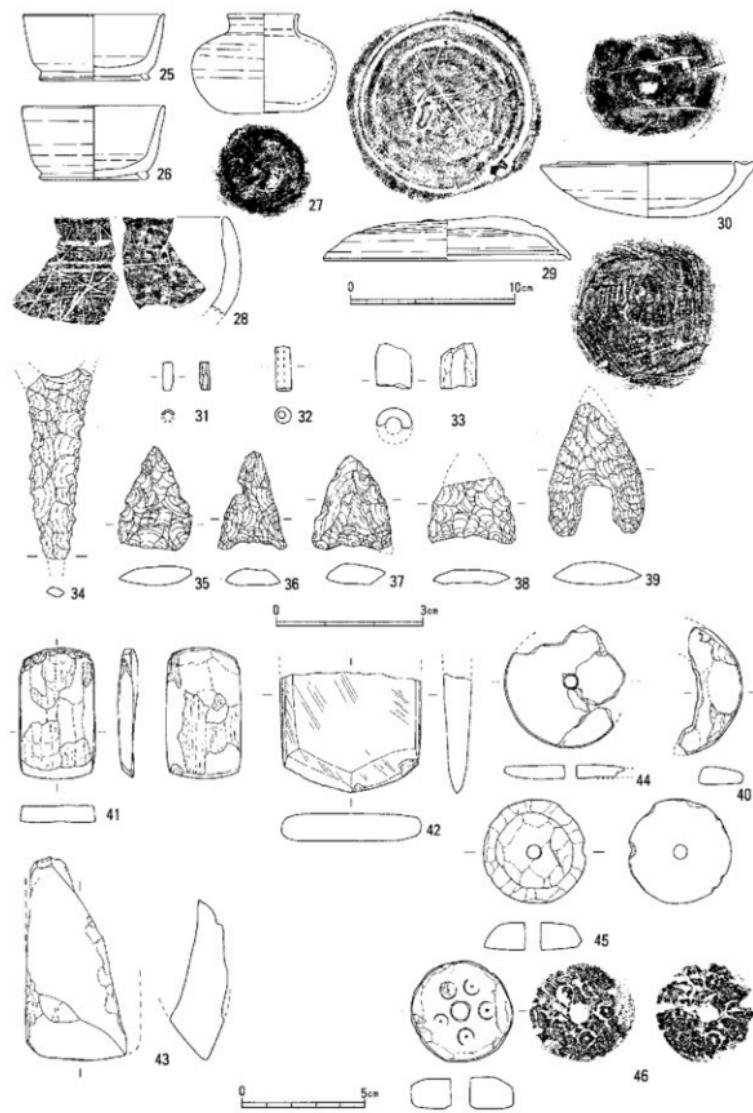
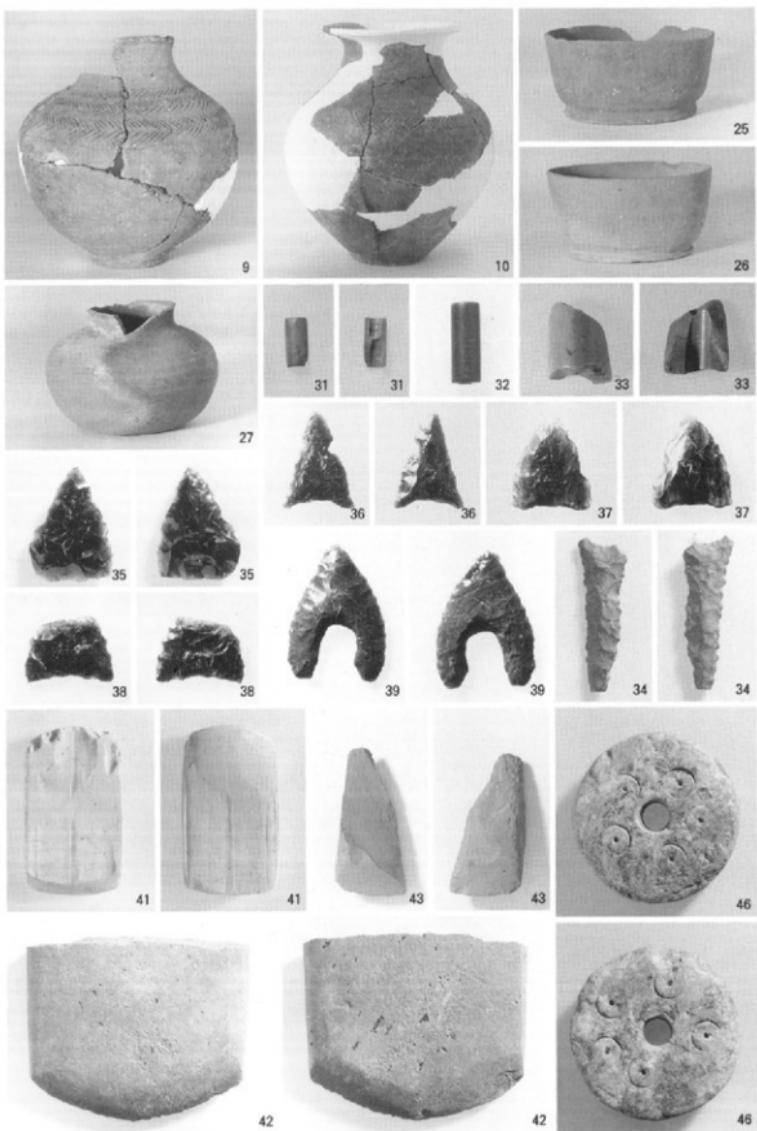


Fig. 60 旧流路出土遺物実測図 2 (25~30-1/3, 31~39-1/1, 40~46-1/2)



Ph. 43 旧流路出土遺物（縮尺不同）

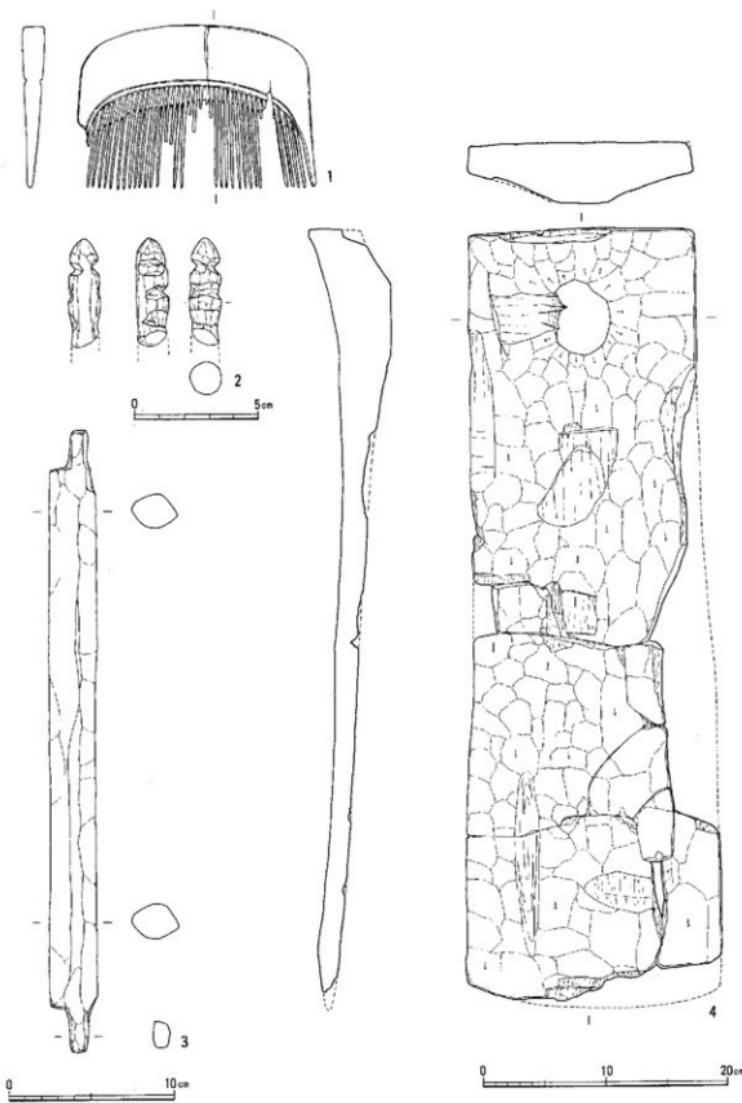


Fig. 61 旧流路出土木製品実測図 1 (1/2, 1/3, 1/4)

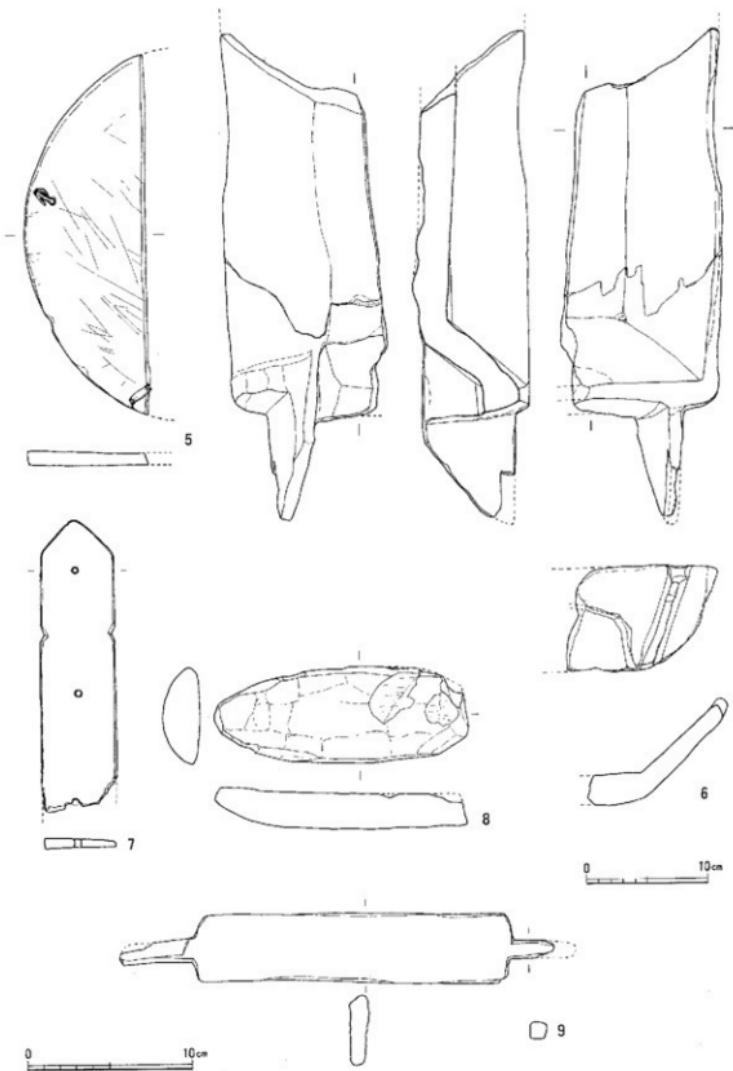
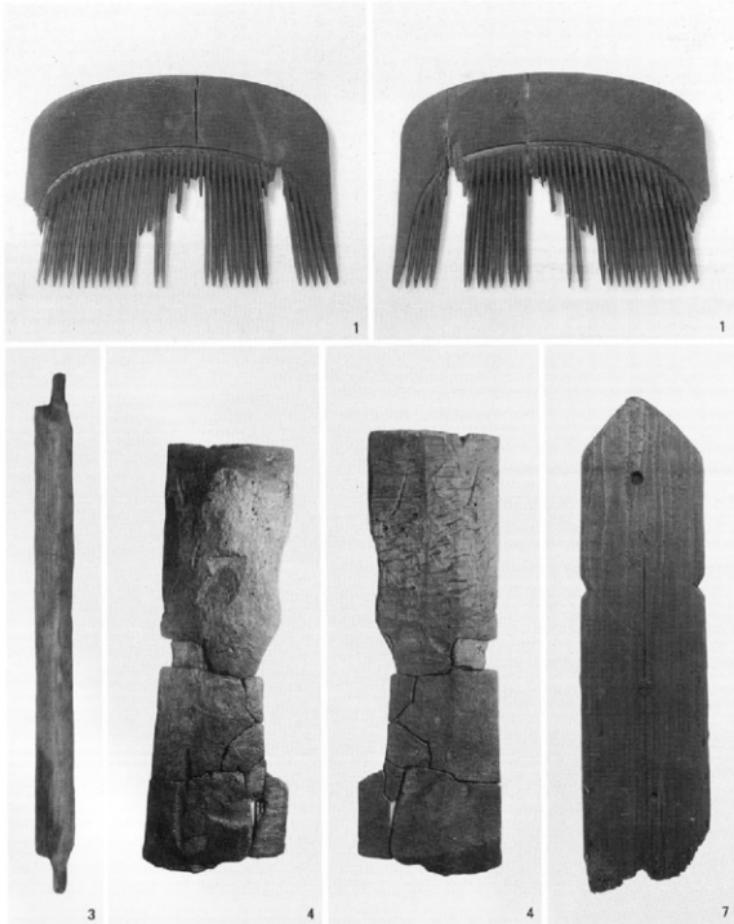


Fig. 62 旧流路出土木製品実測図 2 (1/3, 1/4)



Ph.44 旧流路出土木製品（縮尺不同）

第三章 ま　と　め

最後に、内容的にはこれまで述べてきたことと重複するが、簡単なまとめを試みたい。

本調査地点は、御笠川中流域左岸の微高地および、小河川の流路に当たる。この小河川は、御等川の流れる東側から西に向って流れしており、御等川の分流と考えることができよう。大野城市が実施している仲島遺跡の調査でも大小の河川跡が検出されている。これからみると、これら御笠川の分流は、かなりの範囲にわたって流路を移しながら累れており、本調査地点周辺がきわめて不安定な地域であったことが推測される。事実、遺構が乗る微高地の基盤となっているのは、旧河川が運んできた砂質土であった。

調査地点の南半分は、小河川の流路である。調査範囲内では、三条の流路を確認した。流路内からは杭列なども出土しているが、河川埋積後に営まれた水田に伴うものであろう。河川の流れていた時期は、木製品などからみて、少なくとも中世に下ることは確実だろうと考える。

河川から出土した木製品は、平歛未製品・槽・舟形・曲物・板塔婆・弓箭状木製品・建築材などである。このほか、流木の類も多い。土器では、縄文時代晚期の夜臼式土器から奈良時代の須恵器まで出土しているが、流れ込みと考えられる。

生活遺構は、調査地点の北半分を占める微高地上から検出された。堅穴住居跡、掘立柱建物跡、柱穴、土坑、井戸、溝などである。

堅穴住居跡の遺存状態は悪く2棟を検出し、さらに柱穴の配置から4棟を推定した。出土遺物から時期が押さえられたもので、6世紀末から7世紀初頭を示している。

掘立柱建物跡は、7棟を復元した。2間×2間の純柱建物が多く、倉庫と考えられる。6世紀後半から8世紀前半の建物と推定される。時期的には、堅穴住居跡と重なっており、同時存在した建物もあったろう。柱穴はかなり多く、さらに多数の掘立柱建物跡が存在したであろうことは疑いない。

柱穴には、柱根を残すものがみられた。また、多くの柱穴で、掘り方を埋めるのに黄灰色の粘土を用いていた。柱穴の底に、礎板の石を据えた例はまったく見られなかった。

井戸は、素掘りで円筒形を呈する。人半が、5世紀前半から6世紀後半に属する。55号土坑のように、埋土上部に、完形品の甕・高杯を一括して埋め込んだ例も見られた。

土坑は、さまざまな形態のものがあり、一様ではない。ただし、整った長方形を呈し、箱型の断面を持つ一群があり、注目される。これらは、主軸の方位もほぼ揃っており、一連の十坑と思われる。出土遺物は少なく、中には弥生時代の土器しか出土しない土坑もあるが、その規則性から、7世紀後半を前後する近接した時期に営まれたと考えられる。残念ながら、機能・性格を特定するにはいたらなかった。このほか、旧河川の流路近くに営まれた1号土坑・3号土坑などあるが、いずれもその性格を明らかにできなかった。

溝状遺構は、ほとんどが区画のための溝と考えられる。特に、微高地上を平行して走る3号溝状遺構・4号溝状遺構・7号溝状遺構・9号溝状遺構などは、集落内の区画に関わった可能性が高い。一方、18号溝状遺構・19号溝状遺構などは、微高地上から旧河川部分に向かう排水溝であったと思われる。

出土遺物は、土器類がコンテナ180箱、石器類1箱、木製品および自然遺物12箱を数えた。

これらの遺物のほとんどは今回の報告では割愛せざるをえなかった。さらに検討を要する遺構も少なくない。別考の機会を期したい。



Ph. 45 1区調査風景（北より、背後は福岡市埋蔵文化財センター）

井相田C第6次

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第519集

平成9年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 川島弘文社

福岡市東区柏崎小頭6丁目6番41号

